

# 研究所報

No.54

2009. 5. 1.

## 目次

「真の人間」となる求道と獲信の実践	1
2009年度「指定研究」等研究組織一覧	2
2009年度「指定研究」研究目的紹介	4
2009年度「一般研究」選考結果発表	9
2009年度「一般研究」研究目的紹介	10
海外学会参加報告	13
海外研究調査出張報告	19
海外研究者招聘「公開研究会・共同研究会」報告	21
公開講演会報告	24
特別研究員研究成果報告①②	25.26
彙報	28

## 「真の人間」となる求道と獲信の実践

真宗同朋会運動研究チーフ 教授 水島 見一

1962(昭和37)年、真宗大谷派教団は、「世界中の人間の真の幸福を開かん」(真宗同朋会一住職の手引き—(『真宗』1962(昭和37)年12月)と思念し、真宗同朋会運動を発足した。当時の宗務総長である訓覇信雄は、その運動創始の時代的必然性を、次のように言い当てている。

「中世の神の奴隷であった人間が、そのきずなから解放され、独立して、新しい自由な人間性を回復したのが近代だといわれておるにもかかわらず、その独立したはずの個人は、実は本当の人間ではなかったのであります。実は人間の自我意識によってとらえられたものでありまして、意識の深層にねがす我執の上に立った個人、これが、近代の人間であります。そしてこの近代が限界にきたということは、かかる有我的人間の行詰りにほかならぬのであります。しかもこの行詰まりを打開する道はもはや西欧には見い出すことができないのであります。」(第70回定期宗議会で訓覇信雄総長演説「同朋会の形成促進」、『真宗』1962(昭和37)年7月号)

訓覇はこのように、「近代の人間」を「本当の人間ではなかった」と唱えている。「近代の人間」とは、たとえば、西欧の中世封建的束縛から解放された、「自由」、「権利」、「平等」に基づく民主主義を主唱する近代人、つまり我々のことであるが、そのような我々を訓覇は、自我意識に囚われた「真の人間」ではない、と見定め、そして、

「真の人間の発見は、東洋の仏教をまたねば成就しないのであります。(中略)近代の西欧の精神は、個人の自覚に立つ民主主義の確立とはいいながら、その個人の自覚は、遂に自我意識のエゴイズムをこえることができず、主体的自覚による真の民主主義の確立は、未だ果されておらないのであります。」(同)

と、我々が仏教によって自我意識を超えた「真の人間」として誕生しない限り、「真の民主主義」は確立されないとし、さらに、

「近代ヨーロッパが果たし得なかった真の人間の自覚を明かにし、現代の人類の課題にこたえるべき使命を荷うておる仏教の、その使命を果たすべき『場』が仏教の教団であります。」(同)

と、自我を超える道を世に提示する「場」としての

教団の社会的役割に、大きな期待を寄せているのである。

まことに、この訓覇の演説が今から約50年前のものであるにもかかわらず、「有我的人間」である我々の限界性は、たとえば、現代社会の環境問題に明確に窺い得る科学文明の行き詰まりや、生命軽視の現状に垣間見られる人間性喪失等のさまざまな問題に直面しているように、いよいよ極限に達しつつあるように思われる。21世紀こそ、「真の人間」を明らかにすべき時代なのである。すなわち、現代社会における仏教の可能性の究明こそ、本研究のひとつの方向性となる。

顧みれば、近年、仏教の可能性について、さまざまな角度から提言されているように思われる。それは、混迷する現代という時代から、仏教(教団)が問われていることを意味するが、同時に、仏教(教団)が現代社会に対して、如何に働きかけ得るかという課題でもあろう。真宗同朋会運動は、高度経済成長によって“発展”を急ぐ1960年代の日本人の抱える実存的課題に、真っ向から、それも“草の根”的な実践をもって応答する、時機相應の信仰運動であったのである。

今日、世界において、たとえば「社会参加型仏教(Engaged Buddhism)」のように、さまざまな仏教の社会参加が提唱されているように思われるが、同様に、求道と獲信の実践を訴える真宗同朋会運動も、「社会参加型仏教」のひとつと見なし得るのでなかろうか。真宗同朋会運動は、我々の眼に見えるような社会参加という形態を取っていないかも知れないが、その実践は、「近代の人間」の、エゴを打破することで「真の人間」となるべき道を、人類に開示しているからである。

まことに、真宗同朋会運動の志願は、時代を超えて、極めて至純である。その純粹志願を抱いて、我々は、時代と共に歩むのである。そのためには、我々は、常に旧套を脱ぎ捨て、真宗仏教の純粹志願を自己に明らかにしなければならない。求道と獲信の真生命の自分自身への確かめ、具体的には、真実信心に悪戦苦闘する人格に学び、そして人類に開かれたる仏教の可能性を追求するのである。ここに「聞書」を中心とする本研究の背景がある。

## 2009(平成21)年度「指定研究」等研究組織一覧

### 【特別指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
大谷大学親鸞聖人 750回御遠忌記念 特別指定研究	研究課題 研究員	親鸞像の再構築 門脇 健 (チーフ・教授・宗教学) 一楽 真 (教授・真宗学) 草野 顕之 (教授・日本仏教史学) 延塚 知道 (教授・真宗学) 山野 俊郎 (教授・仏教学) 東館 紹見 (准教授・日本仏教史学) 山田 恵文 (講師・真宗学)
	嘱託研究員	平 雅行 (大阪大学教授) 小山 正文 (同朋大学仏教文化研究所研究顧問) 安富 信哉 (本学特任教授・真宗学)
	研究補助員	玉光 真人 (博士後期課程第3学年) 大 艸 啓 (博士後期課程第2学年)

### 【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究	研究課題 研究員	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開 ロバート F. ローズ (チーフ・キャップ・教授・仏教学) 浅見 直一郎 (キャップ・教授・東洋史学) ディディエ・ヴェステル (教授・フランス語・フランス文化) 桂 華 淳 祥 (教授・東洋史学) 番 場 寛 (教授・フランス語・フランス文学) 松 川 節 (教授・東洋史学・人文情報学) 阿 部 利 洋 (准教授・社会学) 藤 枝 真 (准教授・哲学・宗教学) 村 山 保 史 (准教授・西洋哲学) 井 上 尚 実 (講師・真宗学) 箕 浦 暁 雄 (講師・仏教学)
	嘱託研究員	羽 田 信 生 (毎田周一センター所長) Michael Pye (本学客員教授・マールブルク大学名誉教授) Paul Watt (デポー大学教授) Mark L. Blum (ニューヨーク州立大学准教授)
	研究補助員	江 田 憲 治 (京都大学大学院教授) 広 川 佐 保 (新潟大学准教授) 井 黒 忍 (本学非常勤講師) 圓 山 亜 美 (博士後期課程満期退学) 王 奕 明 (博士後期課程第3学年) 山 高 秀 介 (博士後期課程第2学年) 斎 藤 覚 (博士後期課程第1学年)
西藏文献研究	研究課題 研究員	チベット語文献のデータベース化 福 田 洋 一 (チーフ・教授・仏教学)
	嘱託研究員	三 宅 伸 一 郎 (講師・チベット学) 白 館 戒 雲 (本学名誉教授) ダシユシヨバラニ (特別研究員・本学非常勤講師)

	研究補助員	野村 正次郎 (広島修道大学非常勤講師) Steven Hartwell (マルチスクリプト・ソリューション社) 上野 牧 生 (本学非常勤講師) 太田 蒔 子 (博士後期課程第3学年) 渡邊 温 子 (博士後期課程第1学年)
大谷大学DB研究	研究課題 研究員 嘱託研究員 研究補助員	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル映像化 宮下 晴 輝 (チーフ・教授・仏教学) 兵藤 一 夫 (教授・仏教学) 柴田 みゆき (准教授・人文情報学) 山本 貴 子 (准教授・図書館情報学) 酒井 恵 光 (講師・人文情報学) 岡本 隆 明 (博士後期課程修了・立命館大学グローバルCOE プログラム「日本文化デジタル・ヒューマニテ ィーズ拠点」ポストドクトラルフェロー) 清水 洋 平 (本学非常勤講師・日本学術振興会特別研究員) 松下 俊 英 (博士後期課程第3学年) 林 哲 照 (博士後期課程第3学年)
真宗本廟 (東本願寺) 造営史研究	研究課題 研究員 嘱託研究員 研究補助員	真宗本廟 (東本願寺) 造営史料の研究ならびに『本願を受け 継ぐ人びと—真宗本廟 (東本願寺) 造営史—』の編纂 木場 明 志 (チーフ・教授・国史学) 平野 寿 則 (准教授・日本近世史・仏教史) 伊藤 延 男 (神戸芸術工科大学名誉教授) 川上 貢 男 (京都大学名誉教授・京都市埋蔵文化財研究所長) 永井 規 男 (関西大学名誉教授) 山岸 常 人 (京都大学大学院准教授) 安藤 弥 (同朋大学文学部講師) 岸 泰 子 (京都大学大学院工学研究科助教) 櫻井 敏 雄 (客員教授・建築史・意匠 [日本建築史]) 川端 泰 幸 (本学非常勤講師) 江上 琢 成 (本学博士後期課程修了・慶應義塾大学総合政策学部) 登谷 伸 宏 (本学非常勤講師・京都大学研修員) 大谷 めぐみ (博士後期課程満期退学) 吉田 仁 美 (博士後期課程第1学年)
真宗同朋会運動研究 (和田 穉氏の寄付金による特別研究)	研究課題 研究員 研究補助員	真宗同朋会運動の歴史と現状を「聞き書き」を通して把握し、 その現代的意義を明らかにする 水島 見 一 (チーフ・教授・真宗学) 佐賀枝 夏 文 (教授・社会福祉学) 富岡 量 秀 (講師・真宗学・幼児教育学) 佐々木 秀 英 (博士後期課程第2学年) 松本 幸 伸 (博士後期課程第2学年)

## 【大谷大学史資料室】

研究名	研究課題及び研究組織
大谷大学史資料室	整理課題 資料室長 研究補助員
	大学史関係資料の収集・整理 山本 和 彦 (准教授・仏教学) 大畑 博 嗣 (博士後期課程満期退学) 小野 賢 明 (博士後期課程満期退学)

## 2009(平成21)年度「指定研究」研究目的紹介

### 大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念 特別指定研究

### 親鸞像の再構築

チーフ・教授 門脇 健  
(宗教学)

2011年、親鸞聖人の750回御遠忌を迎える。本研究班は、大谷大学における御遠忌記念事業の一環として、「親鸞像の再構築」という研究課題のもと、発足した研究班である。先の1961年の700回御遠忌以降、真宗教学はもとより、さまざまな研究分野から、新しい研究の成果が多くもたらされ、それらは親鸞研究を大きく前進させている。本研究班では、それらの学問的成果を整理し踏まえた上で、新たな視点からの親鸞像を構築し、未来の親鸞研究への展望を開くことを目的としている。

上記の研究を推進するために、下記の4つのテーマを設けて、相互に連携しつつ継続的に研究活動を行ってきた。

- a. 史的な親鸞像の再検討
- b. 思想教学の検証
- c. 現代における親鸞思想との出会い
- d. 文献目録の作成

「a. 史的な親鸞像の再検討」「b. 思想教学の検証」

「c. 現代における親鸞思想との出会い」の3つのテーマについては、主に学外から講師をお招きし、公開研究会を重ねてきた。その成果はすでに冊子化して第3輯まで公開してきた。今年度は未刊行である第4輯(収録内容:佐々木正「親鸞伝の光と影」草野顕之「親鸞伝研究の諸問題」)の刊行を目指し研究成果を公開していく。更には、「親鸞像の再構築」という課題を具体的に結実していくために、2011年の御遠忌にはa.b.c.のそれぞれのテーマに沿った論集、『親鸞像の再構築—親鸞を訪らう』(仮題)を記念出版する予定である。真宗学・仏教学・史学・哲学・社会学・文学など様々な専門分野の研究者の協力を仰いで、親鸞像の構築に新たな展望を切り開くことを目的とした論集の刊行を目指していく。今年度は執筆予定者との共同研究を重ねて課題を共有するとともに、論集刊行に向けて編集方針を具体的に定めていく。

「d. 文献目録の作成」については、前回御遠忌以降の50年間にわたる親鸞研究を概観するのに資するデータベース並びに文献目録の作成を目指していく。その作成方針は以下の通りである。今年度も引き続き日本語文献の単行本についてデータ入力を行い、今年度中に作業を完了することとしたい。作業遂行のためには人員の大幅な増員が望まれる。また並行して、全集・叢書、学術雑誌所収論文のデータ入力作業に着手する。また、蓄積したデータベースの整理を行い、公開方法を検討していく。

### 国際仏教研究

### 諸外国における仏教研究の動向の 把握と資料の収集・整理・公開

チーフ・教授 ロバート F. ローズ  
(仏教学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。その目的を遂行するために、これまで受信と発信の両面から以下のような活動を行ってきた。本年もこれらを発展的に継続する。

〈受信〉①海外における仏教関係書誌の収集・整理とデータベースの構築。②仏教を中心とした宗教研究者を招聘しての講演会・研究会の開催。③海外における宗教及び関連文化の諸相の調査。

〈発信〉①真宗・仏教関係文献の翻訳と出版。②仏教・宗教関係国際学会に研究員が参加して論文発表。仏教・宗教関係国際学会を企画・開催。

従来は英語圏を中心として研究活動を行ってきたが、近年はヨーロッパや中国など、他の言語文化圏へも活動の範囲を拡大している。本年も〈英語班〉〈ドイツ・フランス班〉〈中国班〉がそれぞれの言語文化圏を担当し、以下のような具体的研究テーマ・目的にそって研究を進める。

## —英語班—

## 〈研究テーマ〉

- ①英語圏における仏教研究動向の把握
- ②真宗・仏教関連資料の英訳出版

## 〈研究目的〉

- ①真宗・仏教関係の国際学会の年次大会参加  
国際真宗学会（6月京都）、アメリカ宗教学会（11月モントリオール）、アジア学会（3月フィラデルフィア）などに研究員を派遣し、情報収集・研究交流を行う。
- ②真宗近代教学アンソロジーの英訳をAn Anthology of Modern Shin Buddhist Writingsとしてニューヨーク州立大学出版（SUNY）から発行する。
- ③佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究  
新たな翻訳プロジェクトとして、佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」を英訳出版するための研究に着手する。
- ④公開講演会の開催  
学術交流の促進を図るため、国内国外で活躍している真宗学・仏教学関係の学者を招聘し、公開講演会を開催する。
- ⑤仏教関係の洋書・学会誌のデータベース公開  
英語班が収集してきた外国語資料の整理を行い、図書館と協力して利用し易い形に改め、データベースを公開できるようにする。

## —ドイツ・フランス班—

## 〈研究テーマ〉

## 仏教・他宗教比較研究

- ①「プロテスタント神学との対話」
- ②「日本における近代化された宗教に関する宗教史的・社会学的観点からの研究」

## 〈研究の目的〉

- ①「プロテスタント神学との対話」  
浄土真宗とプロテスタント神学との対話・比較研究を継続していく。具体的な研究として、マールブルク大学神学部ディートリヒ・コルシュ教授著の『ルター』の翻訳作業が現在進められている。今年度中の出版を計画している。
- ②「日本における近代化された宗教に関する宗教史的・社会学的観点からの研究」  
フランス国立高等学院（EPHE）の宗教社会学部門との交流を継続していく。2010年開催予定のシンポジウム（於 EPHE）の準備として、発表者の中間発表会を随時行う。

## —中国班—

## 〈研究テーマ〉

中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究

## 〈研究の目的〉

中国華北地域、東北地域（いわゆる満洲）、東部モンゴル地域（内モンゴル自治区東部）における宗教及び関連文化の諸相を、歴史史料によって再構成し、さらに現地調査によって明らかにしていく。

## 〈研究方法〉

本学図書館に所蔵される真宗大谷派海外布教関係資料のうち、中国華北・東北地域に関する部分について調査し、中国の在地仏教に対する日本仏教の働きかけの形跡を追究することによって、当該地域、ひいては東アジア全体の宗教活動の様相の把握を目指す。また、本学と中国・東北師範大学（吉林省長春市）との学術提携に基づき、両大学の研究者が往来し双方にて本テーマに関わる共同研究会を実施し、その成果を出版する。さらに現地関係者の協力を得て当該地域に存する仏教遺跡あるいは近時急速に復興しつつあるチベット仏教寺院など宗教施設の探訪調査を行う。2009年度の具体的な予定は以下の通り。

- ①本学図書館所蔵・真宗大谷派海外布教関係資料の調査

華北地域関連の綴資料（仮番号19～25）及び華中地域資料（仮番号26～）について、一覧作成作業及びデータベースへの入力作業を実施する。

- ②東北師範大学との共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進。

- 1) 東北師範大学より曲曉範・胡赤軍両教授を本年6月あるいは7月に一週間程度本学に招聘し、共同研究ならびに公開研究会を開催する。
- 2) 江田憲治（京都大学教授）嘱託研究員および広川佐保（新潟大学准教授）嘱託研究員より専門的知識の提供を受けつつ、1920年代の中国東北・東部モンゴル地域における仏教文化の諸相について、東北師範大学研究者との共同現地調査を行う。
- 3) 研究テーマに関連する国内専門研究者を招聘し、公開講演会・公開研究会を開催する。

## 西藏文献研究

# チベット語文献の データベース化

チーフ・教授 福田 洋一  
(仏教学)

本研究は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し促進をはかることを目的としている。その目的を達成するために、2009年度は、以下の課題に取り組む。

### 1) 大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化、電子テキスト化

大谷大学図書館所蔵のチベット撰述文献のうち、稀観書を優先的にテキスト入力していく。今年度は歴史文献として『ミラレーバの十万歌』、『サムプ寺歴代座主記』、仏教文献として『俱舎論註』、『量決訳註』などの入力・校正を進める。校正が済み次第、データを公開する。また、チベット撰述文献目録のオンライン検索を公開する。

### 2) Otani Unicode Tibetan Language Kitのサポート

6月に開催されるWWDC（アメリカ・サンフランシスコ）に、囑託研究員・野村正次郎氏を派遣。囑託研究員・Steven Hartwell氏とともにMac OS X 10.6向けバージョンアップ作業（とりわけフォントの追加）と情報収集を行う。

### 3) 現地研究機関との共同研究

チベットあるいはインド在住のチベット人研究者を1名1ヶ月から2ヶ月程度招聘し、本学図書館所蔵チベット語文献に対する共同研究をおこない、その成果を紀要ないしWeb上にて公開する。また、夏期休暇中に本班のメンバーを2名、1ヶ月以内（2～3週間）の予定でチベットあるいはインドに派遣し、現地のチベット人研究者と共同研究／文献収集等をおこなう。収集した文献については、リストを作成、公開できるようにする。

### 4) 大谷大学図書館所蔵チベット語文献の整理

蔵外文献中の未整理分（2箱）のリスト作成をおこなう。

### 5) 寺本婉雅資料の研究

借用中の資料のうち、未整理となっている書類類を整理し、リストを作成する。古文書読解能力のある人材を

確保する必要がある。

### 6) オリッサ州SARASVATI研究所所蔵貝葉写本の研究

これまでの調査結果をもとに外部資金の申請をおこなう。

### 7) その他

適宜、内外のチベット文献学関係の研究者を招き研究会を開催する。また、5月にタイのバンコクでおこなわれる、電子仏典に関する会議に研究員1名を派遣し、本研究班の研究状況を示すとともに国外の状況を把握する。

## 大谷大学DB研究

# 大谷大学所蔵貴重資料の デジタル映像化

チーフ・教授 宮下 晴輝  
(仏教学)

大谷大学の所蔵する貴重な学術的資産をデータベース化し、劇的にデジタル化の進む現代社会における活用を図ることは、いまや本学の重大な使命となっている。しかし、これまで個々の研究班や個人によってさまざまな資料のデータベース化が試みられているものの、全学的な視野をもったデータベースの構築はなされてきていない。本研究班では、大谷大学におけるデータベース構築の全学的な視野からの検討とその具体的な実施、および公開方法についての検討を行なう。

課題となるさまざまなデータベース構築に際しては、全学的な取り組みが必要と思われるので、本研究員、囑託研究員はもちろん、さらには学内外の協力者を得て「大谷大学データベース構築に向けての研究会」を組織し、データベース構築についての課題を広く学内で共有するとともに、研究成果を発信してゆきたい。

これまでの成果をふまえ、学内の諸機関（とくに図書館・博物館）、研究所の諸研究班と協力体制を組みながらデータベース構築を行うとともに、真宗関係文化財のデジタル化を進め、2011年の親鸞聖人750回御遠忌に合わせての公開を目指した取り組みを進める。なお、本学所蔵貴重資料のデジタル化・データベース化並びにその公開については、外部資金導入も視野に入れて推進す

る。

本研究班は、下記の項目にわたってのデータベース構築を目指している。

- 1 大谷大学所蔵北京版チベット大蔵経、チベット語蔵外文献、パリー語貝葉写本のデジタル画像データベース化
- 2 真宗関係文化財（音声テープ・写真など）の収集、デジタル化並びに公開
- 3 スタイン・ペリオ収集敦煌出土文献などのマイクロフィッシュのデジタル化
- 4 教行信証、清沢満之自筆原稿など、すでにデジタル化されているデータの移管と公開に向けての検討
- 5 その他の資料

2008年度は、1のパリー語貝葉写本のデジタル画像データベース化、2の真宗関係文化財の収集、3・4に關しての環境整備を重点的に行い、また、1の北京版チベット大蔵経のデジタル画像データベース化に關して、外部資金の導入も視野に入れて推進した。2009年度は、これらの成果を踏まえ、以下に挙げるテーマを中心にデータベース化を推進する。

- 1(a) 北京版チベット大蔵経データのための外部資金導入に向けた、さらなる取り組み
- (b) パリー語貝葉写本の引き続きのデジタル画像データベース化
- 2 現段階で未収集の真宗関連文化財。とくに写真類の収集とデジタル化
- 3 マイクロフィッシュ資料のスキャニング作業
- 4 デジタルデータ保管用の新規ファイルサーバの導入とデータ移管作業

デジタルデータベース化作業の推進と併せて、その公開方法についての検討を重ねてゆく。

## 真宗本廟（東本願寺）造営史研究

### 真宗本廟（東本願寺）造営史料の研究 ならびに『本願を受け継ぐ人びと—真宗本廟（東本願寺）造営史—』の編纂

チーフ・教授 木場 明志  
(国史学)

「真宗本廟（東本願寺）造営史研究」は、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌の記念事業として、2000年以来、本山御遠忌本部が進めてきた「両堂再建史料の研究・整

理・保管」を、真宗大谷派と本学との間で業務委託契約を締結し、2006年度発足した研究プロジェクトであり、本年度までの4年間を研究期間とする。

東本願寺資料の調査は、1990年以来続行されており、漸次その全容が明らかになりつつあるが、その6万点以上の古文書・古記録類の中に、両堂再建を中心とする真宗本廟造営に關する史料は6千点にもものぼる。本研究においては、それら本廟造営史料の調査・整理・研究をふまえ、本廟の造営再建の歴史を明らかにすると共に、『本願を受け継ぐ人々—真宗本廟（東本願寺）造営史—』の編纂を進めることを目的とする。とくに編纂事業については、歴史・建築・美術・工芸・防災等の諸方面に寄与すべく、信仰史・教団史を基盤に真宗本廟の具体的な諸相を描き出し、真宗門徒の帰依処としての存在意義を確認したい。

真宗本廟は、宗祖親鸞聖人の示寂後、1272（文永9）年に東山大谷の地に草創され、本願寺第七世存如の頃には、御影堂・阿弥陀堂を備えた両堂形式になったとされる。江戸初期の1602（慶長7）年、徳川家康による寺地寄進を経て、烏丸七条に寺基を定めて東本願寺が創立されると、1661（寛文1）年の親鸞聖人四百回忌を契機に改築が行われ、その威容を誇る大建築となった。その後、1788（天明8）年、1823（文政6）年、1858（安政5）年、1864（元治1）年の四度に及んで罹災焼失し、そのたびに再建が行われて、現在の建築は1895（明治28）年に竣工された。

こうした焼失と再建の歴史の中で、明治度造営に關しては、作事経過・教化体制・職人組織・部分請負的寄進・門徒参加などの諸問題が明らかにされてきたが、一般の研究では、新たに発見された東本願寺資料の造営史関連諸資料の利用を通して、江戸期における再建造営の諸相について、その全般的な把握が課題とされる。2006年度以来、関連諸資料の精査・分類・翻刻、執筆用資料ファイルの作成を進めると共に、公開研究会・個別課題の研究報告会の成果をふまえて、『本願を受け継ぐ人々—真宗本廟（東本願寺）造営史—』の書名及び内容目次を確定し、昨年度は原稿執筆の段階に入った。2009年度は、本編の内容および諸資料の編集・校正作業を中心に進めて全体の整合性を図り、本プロジェクト終了後、本山御遠忌事務局において、2010年11月に刊行する計画である。なお、引き続き関連諸資料の調査・研究を継続し、各執筆者からの要望に応じながら、原稿執筆・編纂作業を鋭意進めていきたい。

## 真宗同朋会運動研究

# 真宗同朋会運動の歴史と現状を 「聞き書き」を通して把握し、 その現代的意義を明らかにする

チーフ・教授 水島 見一  
(真宗学)

「真宗同朋会運動研究」とは、真宗と社会との関わりを主題とし、具体的には真宗同朋会運動（以後、同朋会運動とする）における求道と獲信に学ぶものである。同朋会運動は、本来、地域に根ざした草の根運動であると考える。したがって、本研究は、一人における「群萌の目覚め」に視点を置き、特に、求道の道程に焦点をあてて、一人ひとりの宗教的人格に触れることを通して、真宗同朋会運動の意義を明らかにすることを目的とする。

また、信仰が生み出す社会性、および人々の精神性に与えた影響なども調査を通して把握し、同朋会運動の現状や社会的・現代的意義を明かにしていきたい。

以上のことから、本研究は全体を理論編と調査編の二部構成として組み立てていく。

I 理論編：本研究の導入研究であり、同朋会の歴史と社会的背景、同朋会運動に対する教団の施策、同朋会運動の中心人物に関する資料を収集し、整理していく。具体的には、三つのテーマを設け、同朋会運動の過去・現状を踏まえ今後の展望を考える。

- 一 同朋会運動における求道と獲信について
- 二 同朋会運動と他宗教との比較
- 三 同朋会運動に影響を与えた各時代の思想及び社会現象

これらのテーマを有意義に探るために同朋会運動の歷程を四つに分けて考察する。

### ① 同朋会運動第一期〔1947～69〕

【教団内】 訓覇本山教学部長就任～開申事件

【社会現象】 集団就職・マルクス主義・新宗教の台頭等

### ② 同朋会運動第二期〔1969～81〕

【教団内】 開申事件～新「宗憲」発布

【社会現象】 大阪万博開催・マルクス主義から消費時代へ・神秘主義的宗教の台頭等

### ③ 同朋会運動第三期〔1981～96〕

【教団内】 新「宗憲」発布～第25代大谷暢顕門首就任式

【社会現象】 バブル経済の崩壊・阪神大震災等

### ④ 同朋会運動第四期〔1996～現代〕

【教団内】 第25代大谷暢顕門首就任式～現代

【社会現象】 アメリカ世界同時多発テロ・サブプライム問題等

II 調査編：本研究の中心であり、門信徒の方々に「聞き書き」という手法を用いた調査を展開する。そのことを通して、宗教的人格を明らかにしていく。

具体的には門信徒の方々への「聞き書き」という調査手法を展開する。その「聞き書き」では、一人ひとりの求道の道程を「聞く」ことを通して、その宗教的人格を具体的に浮き彫りにしていく。そのためにも以下の事項が課題である。

○調査員一人ひとりの「聞き書き」への理解を深めること。

○「聞き書き」調査の結果の扱い方



## 2009(平成21)年度「一般研究」選考結果発表

## 【共同研究】

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
桂 華 淳 祥	研究課題 石刻史料からみた宋元時代華北地方における仏教の社会史的変遷に関する基礎研究 研究員 桂 華 淳 祥 (教授・東洋史学) 浅 見 直 一 郎 (教授・東洋史学) 協同研究員 松 浦 典 弘 (大手前大学准教授) 藤 原 崇 人 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員)	※科学研究費採択のため補助金なし
加 来 雄 之	研究課題 『教行信証』(坂東本)の総合的研究のための基盤構築 研究員 加 来 雄 之 (教授・真宗学) 一 楽 真 (教授・真宗学) 織 田 顕 祐 (教授・仏教学) 浦 山 あゆみ (准教授・中国語学) 藤 枝 真 (准教授・哲学・宗教学) 井 上 尚 実 (講師・真宗学) 藤 元 雅 文 (講師・真宗学) 協同研究員 廣 瀬 惺 (本学非常勤講師・同朋大学教授) 田 中 ケネス (武蔵野大学教授) 安 富 信 哉 (本学特任教授・真宗学)	200万円
佐賀枝 夏 文	研究課題 近代真宗大谷派の社会实践に関する研究 一保育・教育・福祉での教学からの実践への展開一 研究員 佐賀枝 夏 文 (教授・社会福祉学) 水 島 見 一 (教授・真宗学) 富 岡 量 秀 (講師・真宗学・幼児教育学) 協同研究員 真 城 義 麿 (大谷中・高等学校長) 脇 淵 徹 映 (大谷保育協会理事長)	200万円
渡 部 洋	研究課題 元朝期の言語接触に関する文献学的研究 研究員 渡 部 洋 (准教授・中国語・近世の中国語文法) 松 川 節 (教授・東洋史学・人文情報学) 協同研究員 小 野 浩 (京都橘大学教授) 古 松 崇 志 (京都大学人文科学研究所助教) 石 野 一 晴 (千里金蘭大学非常勤講師) 毛 利 英 介 (日本学術振興会特別研究員・神戸女子大学非常勤講師) 研究協力員 伴 真 一 朗 (博士後期課程満期退学)	200万円

## 2009(平成21)年度「一般研究」研究目的紹介

### 共同研究

#### 石刻史料からみた宋元時代 華北地方における仏教の 社会史的変遷に関する基礎研究

研究代表者・教授 桂華 淳祥  
(東洋史学)

本研究は、宋・元時代の華北地方における仏教と社会との関わり、歴史的変遷について、中国史の視点に加え、当時華北を領有していた遼・金・元といった異民族の支配体制や、朝鮮半島および日本との交渉など周辺の諸民族あるいは地域との関係という視点からもアプローチして、従来の仏教史に対する認識を再検討するとともに、そこに現れる事象が中国に限らず東アジア世界全体に及ぶものであることを提唱して当該研究の更なる展開を導こうとするもので、昨年度からの継続研究である。

本研究で集中的に扱おうとするのは「石刻史料」である。これは中国では清朝時代から、また我が国でも20世紀前半には多くの研究者によってその史料的价值が認められていた。しかしそれをういた研究が盛んに行われるようになったのは、中国の社会情勢の変化によって研究環境が改善されはじめた1980年代以降である。また近年には科学技術の発展によって史料のデジタル化も可能になった。これらの変革によって碑刻の拓本や録文、そしてより精度の高い拓影が入手しやすくなったことは、現地調査による新たな知見などと相俟って、従来は知られていなかった史料や「編纂史料」からだけでは得られない事象のさらなる発掘も期待でき、本研究にとって極めて有効である。

このような環境を生かしながら具体的な活動としては、既知のものも含め当該時代の仏教関係石刻史料の蒐集と整理、その作業で得られた史料について研究班メンバーの会談による検討、そして現地調査などを行っており、それによって本研究の基礎データの充実を図っている。

本研究は、従来の研究成果を踏まえた上で、複数の研究者による多角的な観点からより多くの具体的な事象をとらえ、仏教界の実態を跡付けようとするものである。

またこの研究の主眼は仏教の活動であるが、それは当該時代の政治・経済・社会の動きなどとも密接に関わっており、ここで得られる成果は、それらの動向を浮かび上がらせる一途ともなり得る。その意味において、同時代を扱う他の分野の研究にも寄与出来よう。

### 共同研究

#### 『教行信証』(坂東本)の 総合的研究のための基盤構築

研究代表者・教授 加来 雄之  
(真宗学)

本研究は、親鸞の真蹟『顕浄土真実教行証文類』(東本願寺蔵・国宝。以下、『教行信証』(坂東本)と略す。)を総合的に研究するための基盤構築を目的とする。

親鸞は中世仏教誕生の現場に立ち会った仏教者であり、そして『教行信証』(坂東本)は親鸞の真蹟・手沢本であるがゆえのさまざまな情報を含んでいる。しかしこれまでも『教行信証』(坂東本)の文献学分野の研究は存在するが、『教行信証』(坂東本)の独自性に基づいた思想研究においてははまだ充分とはいえない。『教行信証』研究の多くは、個々の研究者の専門内における個別的な研究であり、原典(坂東本)に依拠していないため、研究の精密さにおいて不十分であった点が反省される。

また今日、人文学においても専門領域の枠組みが解体され、研究状況がグローバル化しつつある。このような状況を鑑み、親鸞の思想の営みを、日本・世界の思想の文脈のなかで定位するために『教行信証』(坂東本)を取り上げ、学際的・国際的な側面から照射する総合的研究に向けての基盤的研究が必要である。

学際的研究については、『教行信証』(坂東本)を教学・思想的文脈と文献・文学的文脈から検証する。真宗教学、近代宗教哲学などによる『教行信証』研究を体系的に把握することで解釈上の可能性を探る。また『教行信証』(坂東本)を中世日本という広い文脈のなかにおいて精緻かつ多角的に研究することは、日本中世における画期的な思想の営みについての生き生きとしたイメージと新たな知見を提供することになる。あわせて今日ま

でほとんどなされていない日本中世文学の表現方法という文脈からの『教行信証』(坂東本) 検証によって見てくることも少ないはずである。

国際的研究については、日本中世仏教思想のテキストを翻訳・解釈する上で惹起するさまざまな問題を『教行信証』(坂東本) という具体的な例をとりあげながら検討する。これらの研究は従来の海外における親鸞研究にはない新しい解釈方法の可能性を開くことになる。

2005年、『教行信証』(坂東本) の精巧なカラー複製本が刊行され研究の基礎条件が整いつつある。具体的には、『教行信証』(坂東本) を精読し、その思想解明に必須となる挑戦的なテーマを設定し、それについてこれまでの研究成果を収集分析し、その上で従来の縦割りの枠組みを破る横断的な共同研究を実施する。最終的には『教行信証』の総合的研究の目指すべき方向性を見出し、その成果を学界に提供したい。

## 共同研究

### 近代真宗大谷派の社会实践に関する研究 —保育・教育・福祉での 教学から実践への展開—

研究者代表・教授 佐賀 枝夏文  
(社会福祉学)

本研究は、真宗教学に立脚した、保育・教育・福祉の3領域の社会实践の歴史的背景と現状への調査を通して、真宗教学から社会实践の展開における、理念の確認と課題を抽出し、改めて3領域の実践現場に真宗の社会实践のあり方を提言することを目的とする。そのための基礎研究から実践研究のプロセスを構想している。

真宗教学は、非常に厳密且つ重厚な教学研究の歴史をもっている。そして近代以降、真宗教学を基盤として真宗大谷派は、保育・教育・福祉の3領域において、具体的な社会实践を展開し続けてきた。その中には、先駆的な事業展開もあり、その実践の基盤となっているものも少なくない。しかし現在、実践現場では、実践理念としての真宗教学との関係性をより明確にする必要がある。3領域の実践現場では、関係性の根拠が課題となっている。このことから本研究は、実践現場と連携した実際の研究を展開していくことを目的とした。

そこで本研究は、保育・教育・福祉の実践現場との研究連携体制の構築をすすめて研究を行う。この3領域の中で教育事業は、大谷大学を中心に展開され、現在、大学8校、短期大学9校、高等学校19校、中学校5校、小学校1校、幼稚園1園の真宗大谷派学校連合を構成している。また保育事業は、現在、社団法人大谷保育協会があり、加盟園は幼稚園・保育園合わせて、現在約550園を抱え、実践を展開している。また、福祉事業は、教誨師に端を発して多岐にわたる実践を展開している。このように、真宗教学を基盤とする多くの社会实践が展開されていることから、自ずと社会的責任は大きく、また必然的に実践現場からの真宗教学に対する期待や要望も多くなっているのが現状である。

このことから本研究は、3領域の実践現場との連携体制の構築から、真宗教学と社会实践の展開が、如何に切り結び、今後更にどのように社会に貢献していくことができるのかを、明らかにしていきたい。

本年度は、具体的には、真宗大谷派宗門、関連研究機関および実践現場での実際的な調査、すなわち、保育・教育・福祉の3領域の実践現場との連携した、調査(フィールドワーク等)を通じて、それぞれの実践における真宗教学の基盤と実践展開における現代的な課題を把握する。そのことを通して、真宗教学と社会实践における歴史的足跡を明らかにし、その事跡から実証的に分析と考察を重ねて研究を深めたいと考えている。

共同研究

## 元朝期の言語接触に関する 文献学的研究

研究者代表・准教授 渡部 洋  
(中国語・近世の中国語文法)

13世紀に登場した元王朝は東アジアにおいて多種多様な民族の接触を活発にさせ一種独特な「多言語環境」を持つ社会を形成させた。この王朝の支配時期は100年ほどで長くはないが、それ以前の遼、金等の長く続いた北方民族の支配が中国北方に住む漢族の言葉、所謂「漢児言語」を生じさせ、それが元王朝の特殊な「多言語環境」下において一つの共通語として使用された。そうした共通語が色濃く反映する文献が元王朝の時代に多数出現し、その中の一部には特殊な漢文も使われており、当時の「多言語環境」下の言語の特殊性を顕著に表している。例えば、『元典章』や『孝経直解』、更には最近発見された『至正條格』等であるが、これらの文献には「白話風漢文」或いは「蒙文直訳体漢文」と呼ばれる独特な口語体漢文が使われている。但し、その起源が唐宋時代の口語体漢文にあるのか、或いは元朝の支配層であったモンゴル人の使用言語の影響によるものなのか、学界の結論は未だ出ていない。

申請者は元朝時代の「白話碑」や『元典章』といった口語体漢文資料における文法構造の分析研究を行う過程で、こうしたモンゴル語と漢文の言語接触を扱う場合、モンゴル語から漢語へどのような影響があったのかを解明するだけでは不十分であり、漢語からモンゴル語への影響をも考察する必要があると考えている。当時の漢語がモンゴル語から何らかの影響を受けているとするならば、逆に当時のモンゴル語にも漢語からの何らかの影響があつてしかるべきと考えるからである。この点を明らかにするには漢文とモンゴル語が併記されたバイリンガル資料の研究が必要不可欠であるが、残念ながらそのバイリンガル資料についての研究は、今現在十分と言えるものではない。アメリカのモンゴル学者クリーヴス F.W.Cleavesが1950年代に詳細な訳注を公表しているが、その後、半世紀が経過しているにもかかわらず、専門的研究は一切発表されていないのである。最近になって研究分担者の松川が、本研究計画の対象資料の一つである『勅賜興元閣碑』(1346年)のモンゴル文面の訳注を公

表したが、漢文原文との比較対照研究までには至っていない。

そこで本研究の目的は、中国語、モンゴル語、ペルシヤ語資料を用いてそれらを専門的に研究する者が中心となり、更にチベット語、トルコ語資料の扱いに通暁した研究者との協働によって、この時代に特徴的な「多言語環境」下の言語接触状況を解明するための手がかりとなるバイリンガル資料についての基礎データを学界に提供する点にある。その結果、元朝の言語接触・多言語環境についての新たな知見がもたらされると考えられ、その意義は大きい。研究成果が中国語学界、東洋史学界において一つの研究潮流として認められるものと確信する。

## 海外学会参加報告

### ハンガリー・イタリアの大学・研究所の訪問と 第十二回ヨーロッパ日本研究協会(EAJS) 国際会議の参加について

国際仏教研究 チーフ・教授 ロバート F. ローズ

2008年の9月11日(木)から25日(木)のあいだ、国際仏教研究班の活動の一環として、ハンガリーとイタリアの大学や研究所を訪問し、ヨーロッパ日本研究協会のパネルに参加する機会に恵まれた。日程前半の9月11日から14日までは、井上尚実講師と大学院博士後期課程在籍中のマイケル・コンウェイ研究補助員と3人でハンガリーの首都ブダペストにあるエトウエシ・ロラード大学を訪れ、その大学の教員・学生のために中国仏教についての講演を行うと共に、ハンガリーの仏教研究・東洋学研究の現状について情報を収集することができた。さらに15日(月)にはイタリアへ移動し、公務のため一足送れて日本を出発した木越康准教授と合流し、ローマのイタリア・アフリカ東洋研究所とナポリのナポリ東洋大学を見学した。そして最後に19日(金)にはイタリア半島最南端の都市レッチェ(Lecce)へと移動し、9月20日(土)から23日(火)にかけて開催された第十二回ヨーロッパ日本研究協会(European Association for Japanese Studies, EAJSと略す)国際会議に参加し、四人でパネル報告を行った。二週間以上にも渡る長旅ではあったが、ヨーロッパが持つ仏教学や東洋学の伝統の重みと新しい発想を再確認する貴重な機会であった。

#### ハンガリーのエトウエシ・ロラード大学

私たちが最初に訪問したのは、ブダペストのエトウエシ・ロラード大学(Eötvös Loránd University、以下ELTEと略す)であった。いうまでもなく、日本からブダペストへの直行便はない。そのため9月11日の早朝に伊丹空港から出発し、成田経由でパリのシャルル・ドゴール空港へ飛び、そこでハンガリーのマーレブ航空の中型旅客機に乗り換えてブダペストへ向かうという方法を取った。パリまではスケジュール通り順調に進んだが、そこで乗り継ぎの飛行機が二時間以上も遅れ、ブダペストに着いたときは現地時間で深夜近くになっていた。京都を出発してから、実に25時間もの長旅であった。さらに不幸なことに、井上・コンウェイ両氏のトランクが紛

失するというハプニングもあり(幸いに一日遅れでパリから到着した)、ブダペスト空港まで迎えに来てくれていたELTE日本学科主任の山地征典教授と中国法学史を専門とするSalát Gergely准教授に連れられてホテル・ペレグリヌスに着いたときは、心身ともに疲れ果てていた。シャワーを浴び、すぐにベッドに転がり込んでしまった。(ちなみに、ハンガリーの人名は、日本と同様姓・名の順序になっている。)

しかし、翌朝ホテルの周辺を散策してみると、一瞬にしてブダペストの魅力に取り付かれてしまった。以前、当時まだ社会主義政権下にあった時期にハンガリーへ留学した経験を持つ佐賀枝夏文教授から様々な情報を得ていたが、佐賀枝先生から教えていただいていた通り、ブダペストは落ち着いた美しい都市であった。市の中心を流れるドナウ川にはエレガントな「くさり橋」が架かり、その対岸に立派な王宮が立つ「王宮の丘」がそびえている。さらに市内の目抜き通り沿いにはしゃれたアールデコ調の建物が建っていると思えば、一步裏通りに入ると中世を思わせるような家々が軒を並べている。またホテルから5分ほどのところには鉄骨とガラスで作られた巨大な中央市場があり、山盛りに積まれた野菜やハム・ソーセージや観光客のためのみやげ物が売られていた。特に各店舗の軒先に吊り下げられていた真っ赤なハンガリー名物のパプリカは印象的であった。

午後には、ホテルまで迎えに来てくれたKósa Gábor准教授(中国科学史の専門)に案内され、講演のため古い町並みを通りELTEへ向かった。ELTEは1635年に創立されたハンガリー最古の大学であり、現在3万人以上の学生数を誇っている。大学の本部キャンパスはブダペストの中央にあり、敷地内には重厚で歴史の重みを感じさせる校舎が並んでいた。また正門から少し入ったところには、大学の名前の由来になった物理学者エトウエシ・ロラード(1848-1919)の像も立っていた。

ハンガリーは長い東洋学、特に中央アジア研究の伝統を持つ。チベット研究の草分け的存在であったチョーマ・ド・ケーラス(Alexander Csoma de Kőrös 1784-1842)

はハンガリー人であったし、敦煌文書を発見した有名な探検家スタイン (Sir Aurel Stein) も、後にイギリスに帰化したものの、実はハンガリーの出身である。またモンゴル研究で知られるリゲティ (Louis Ligeti, 1902-1987) も ELTE で教鞭を取っていた。このような歴史的背景をもつ ELTE では戦前から東洋学学科が設立され、アジア諸国の言語や文化が教えられている。日本語・日本文化の研究や授業も、山地教授を中心に盛んに行われている。また仏教研究にも力を注ぎ、インド・チベット・中国・日本などの仏教を総合的に研究する修士課程を立ち上げ、東欧における仏教研究の中核センターとなるべく語学教育・関連図書施設などの拡充を進めている。数年前、ELTE で仏教学を担当しているハマル・イムレ (Hamar Imre) 教授 (中国仏教、特に華嚴思想が専門) が大谷大学で一年間過ごされたこともあり、山地教授とハマル教授のお力添えを得て、大谷大学と ELTE との間の学術交流協定が昨年締結された。今回の訪問は、この協定の基づいた招待であった。

さて、ELTE 到着後、午後四時から Three Truth/Three Contemplations Theory in Tiantai Buddhism (「天台における三諦三観の思想」) という題で私が約一時間半、英語で講演を行った。講演を依頼されたとき、教員や大学院生を中心とした小規模なセミナー形式の発表会をイメージしていたが、案内されたのは大きな講義室であり、学部生を中心に約40人の聴衆が集まっていた。講演の内容はかなり専門的であったため、仏教についてあまり知識のない学生たちには少し申し訳ない結果となったが、みな熱心に講演を聴いてくれてありがたかった。その後、Kósa 准教授と Pap Melinda 講師の案内で中国学科の施設を見学し、ELTE における仏教関係の授業等の説明を受けた。

翌13・14日の週末には、ゆっくり ELTE の先生や大学院生と意見交換をすることができた。13日(土)には山地教授の招待により Salát 准教授、Kósa 准教授、Pap 講師 (ハマル教授はサバティカルで渡米中のため欠席) と会食し、その席で以前から話題に上がっていた学術交流提携の一環としての大谷大学学長の ELTE 訪問および日本仏教関係の教員派遣を早期に実現できるようにという要請を受けた。また14日(日)には、Pap 講師の案内で、ブダペスト市内の王宮や教会、さらには少し郊外にあるセンチンドレという芸術家の多く住む村を見学することができた。ちなみに Pap 講師は中国仏教、特に天台思想を研究対象とし、留学生として中国に長く滞在した経験を持ち、流暢な中国語を話す若い研究者である。近い将来大谷大学で中国天台の研究を行うことを希望しており、それに向けて現在は日本語の勉強に取り組んでいる。

## イタリア国立アフリカ東洋研究所とナポリ東洋大学

15日(月)はローマへの移動日であったが、早朝の飛行機に乗るため、夜が明けないうちからホテルを出て、飛行場へと向かった。天候はあいにくの雨。しかし真つ青なアドリア海を通過し、イタリア半島の中心を南北に連なるアペニン山脈を越えると、あつというまに太陽の降り注ぐローマに着いた。ハンガリーでは薄手のコートがほしいほど寒かったが、イタリアは半袖のシャツで十分であった。改めて南北ヨーロッパの気象の違いを実感することができた。

ローマでは日本から遅れて到着した木越准教授と合流し、庶民的なスパゲッティのレストランで再会を祝った。その翌日にはバチカンなど市内の宗教施設を見学し、17日(水)にはイタリアにおける東洋研究の中心的研究施設のひとつであるイタリア国立アフリカ東洋研究所 (Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente, 以下 IsIAO と略す) を訪問した。IsIAO は1995年にイタリア・アフリカ研究所 (Istituto Italo-africano) とイタリア中東・極東研究所 (Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, IsMEO と略す) を統合して誕生した研究所である。IsMEO とはいえ、1933年に著名なチベット学者ジュゼッペ・トゥッチ (Giuseppe Tucci, 1894-1984) によって設立された由緒ある研究所である。戦後トゥッチによって開始された Serie Orientale Roma というモノグラフ・シリーズや学術雑誌 East and West は、現在も IsIAO によって引き継がれている。また IsIAO は日本研究の学術雑誌 Il Giappone も発行していることを付け加えておく。

IsIAO はローマ市中心に位置するボルゲーゼ公園に隣接する閑静な住宅地にあった。まだ夏休みの期間中であったようで、あまり人気はなかったが、館内をアルバイトの学生さん (大学院生で日本の近代版画と書を研究している) が案内してくれた。館内で特に印象に残ったのは、広々として明るい図書室であった。よく使い込まれた大正新修大蔵経を初め、多くの仏教関係の図書も所蔵されていて、研究を行うための充実した環境を提供する図書室であった。お土産に最新号の East and West と Il Giappone をいただいて、いつかサバティカルを取って、ここで研究に没頭したいという思いを抱きながら、IsIAO を後にした。

翌日は午前中にローマのテルミーネ駅から特急に乗り、ナポリへと出発した。のどかな田園地帯を一時間ほど行くと、すぐに目的地に到着した。ナポリではナポリ東洋大学 (Università degli Studi di Napoli "L'Orientale", UNIOR と略す) を訪問することが最大の目的であった。

この大学は1732年に創立されたヨーロッパ最古の東洋学研究の大学である。1711年から1723年の間、中国で宣教師をしていたマテオ・リパ (Matteo Ripa) が、キリスト教へ改宗した4人の中国人と共にナポリへもどり、中国語を教授する学校を作ったのが、その始まりとされている。大学は狭い路地の入り組んだナポリ旧市街 (ユネスコの世界遺産) にあった。その本部はPalazzo Giussoといい、旧市街の広場に面した三階立ての重厚な作りの建物であった。驚いたことにこの建物は、その名の通り、かつて貴族の館であったため、今でも館内にはバロック様式の飾りの跡が壁や天井が残されていた。UNIORで私たちを迎えてくれたのは、日本語・日本文化の授業を担当されているパオロ・カルヴェッティ (Paolo Calveti) 教授であった。カルヴェッティ教授は、東京のイタリア大使館で勤務されていたこともあって、とても流暢な日本語を話されていた。学内の図書館などの施設を案内していただきながら、イタリアの日本研究の現状についていろいろと教えていただいた。そのときの会話の中で、教授はイタリアの教育文化財政の悪化によって多くの教育機関・研究機関 (UNIORのみならず、先に訪問したIsIAOも同様) が予算削減に迫られていることを嘆いていた。しかし、ここでもヨーロッパにおける東洋学の伝統の重みとアジアに対する関心の高さを感じる事ができた。

## 第十二回ヨーロッパ日本研究協会 (EAJS) 国際会議

19日(金)にナポリから鉄道でEAJS国際会議の開催地レッツェに移動し、夜の10時頃に宿に到着した。イタリア国鉄のチケットは現地の窓口で購入するよう指示されていたが、ナポリ駅の窓口へ行く予定していた列車の切符はすべて売り切れてしまっており、雨の中3時間も乗り継ぎ駅で待たなければならなくなった。(ちなみに今回の出張では移動日はみな雨というジンクスがあり、帰国時に飛行機の乗り換えのために立ち寄ったイギリスのヒースロウ空港も雨であった。) 現地の事情を考えると、多少費用がかかっても、チケットなどは事前に購入しておくべきであったと反省した。

レッツェは、日本ではあまり知られていないが、今回の訪問した町の中でもっとも美しいところであった。場所は、イタリアを長靴にたとえるならば、かかとの真ん中に当たるところといえば分かりやすいであろう。町全体が迷路のようで、細い道の両側には、まばゆいほどの白く塗られた石作りの家々が続く。建物の多くは、この地方の特産で加工しやすい石灰岩で作られているため、細かく彫られた彫刻などで飾られている。これをレ

ツェ・バロック様式というが、特に町の中心に位置するサンタ・クローチェ教会のファサードは、見る人を圧倒する。また教会のそばには、古代ローマの円形闘技場も残されていて、歴史のロマンを感じさせる。

ヨーロッパ日本研究協会の国際会議は3年に一度、定期的に開催されているが、上記のように今回は20日(土)から23日(火)まで、レッツェのサレント大学 (Salento University) とその近くのホテル・ティツィアーノを主たる会場として開かれた。今回は8の部会 (都市・環境研究、日本語・日本語教育、文学、芸能、人類学・社会学、経済学・経済社会史、歴史・政治学・国際関係、宗教・思想史) と12の学問分野横断型のパネルが設定されていた。前回のウィーンでの第十回国際会議 (2005年) にも、大谷大学から安富信哉教授を中心として、浄土教に関するパネルを開催していたという経緯もあり、今回も宗教・思想史部会で、近代における浄土の理解についてのパネルを開催することになった。

今回の宗教・思想部会では10パネルに分かれて、31の研究発表が行われた。初日は東北大学の佐藤弘夫教授による基調講演「天皇言説とイデオロギー」(Tenno Discourse and Ideology) で始まり、連日「ディスコース (言説) としての宗教：権威の確立と異議申し立てにおけるパフォーマンス (儀式等の遂行) と遂行性」(Religion as Discourse: Performance and Performativity in Establishing and Contesting Authority) という共通テーマのもとで、ヨーロッパ・アメリカ・日本からの参加者による発表が行われた。発表内容は多彩で、中世仏教の思想や儀式、熊野信仰や三輪流神道の神祇灌頂、曹洞宗の羅漢講式や日蓮宗の苦行、さらには戦後における靖国神社の再建など、興味深い発表が多数行われた。特にハーヴァード大学でともに大学院生であったイスラエルのIrit Averbuch教授による山伏神楽に関する「平和の領域—神楽における権力闘争・妥協・パロディー」(Territory for Peace: On Power Struggles, Compromise and Parody in Kagura Performances) は、豊富なフィールドワークに基づいたすぐれた発表であった。

23日(火)9時から10時半には私たちの「大谷大学パネル—浄土はどこへ行ったのか? 近代真宗における教義上の権威の批判と発展」(Otani University Panel: Where Have All the Pure Lands Gone? Challenging and Developing Doctrinal Authority in Modern Shin Buddhism) のパネルが開かれた。このパネルでは、金子大栄師の『浄土の観念』を中心に近代真宗における浄土の理解について再検討を試みたものである。その内容を具体的に示すと次の通りである。

井上尚実 「宗教言説からの俗悪の排除—絵解き禁止

と近代浄土オーソドクシーの確立」(The Expulsion of Vulgarly from Religious Discourse: A Ban on Etoki and the Establishment of the Modern Pure Land Orthodoxy)

木越康 「野々村直太郎の浄土教批判」(Nonomura Naotaro and his Critique of Pure Land Buddhism)

マイケル・コンウェイ 「教義の権威と革新—金子大栄の異端者から英雄への変革」(Doctrinal Authority and Innovation: Kaneko Daiei's Transformation from Heretic to Hero)

コメンテーター ロバート・F・ローズ

最終日の朝一番だったので出席者が少ないことを予想していたが、聴衆は20人近くと意外には多く、質疑応答も活発に行われた。また大谷大学パネルの後には、本研究所の特別研究員であるウゴ・デッシ(Ugo Dessi)博士と前特別研究員エリザベッタ・ポルク(Elisabetta Porcu)博士による真宗関係の発表が続き、国際的学会において浄土教・真宗研究への関心を高める意味でも、有意義な学会参加だったと思われる。なお、今回パネル発表した論文については、今後いずれかの学会誌に発表する予定である。

## 海外学会参加報告

### サンフランシスコ大学

### 「アジアにおける宗教とグローバル化」学会に参加して

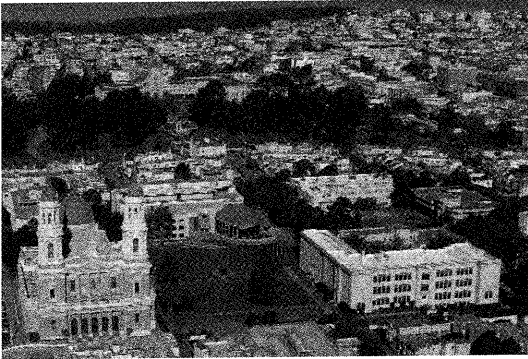
国際仏教研究 研究員 井上 尚実

国際仏教研究〈英語班〉の活動の一環として、2009年3月13日と14日の二日間サンフランシスコ大学(University of San Francisco)で開催された「アジアにおける宗教とグローバル化：今後10年の見通し・類型・諸問題Religion and Globalization in Asia: Prospects, Patterns, and Problems for the Coming Decade」というテーマの学会に参加するため米国カリフォルニア州を訪れた。学会終了後、同州の仏教大学院大学(Institute of Buddhist Studies)・毎田周一仏教センター(Maida Center of Buddhism)・パークレー東本願寺、カリフォルニア大学サンタバーバラ校宗教学部大学院を訪問し、米国における仏教研究と真宗開教に関する情報を収集し、交流を行なった。以下はサンフランシスコ大学における学会の報告である。

13日(金)14日(土)の学会は、金門橋に近い高台にあるサンフランシスコ大学のキャンパスで開かれた。この大学は1855年に創立されたイエズス会カトリック系の人文・社会科学を中心とした中規模の大学(学部学生5500人、大学院3300人)で、サンフランシスコという国際的な土地柄、イタリア系・アイルランド系からアジア系・

アフリカ系・メキシコ系まで人種的・文化的・社会経済的に多様な背景をもつ学生が集まっている。2001年9月11日(「同時多発テロ」発生の日)に理事会で承認された最新のVision, Mission, and Values Statement(大学の展望・使命・価値観の声明)には、次のように謳われている。「サンフランシスコ大学は、イエズス会カトリックの中で第一の都市的の大学として国際的に認められるように、グローバルな視野をもって、より人間的思いやりのある公正な世界を作り出していく指導者を生み出す教育をおこなう。」この理念に沿った研究機関の一つとして環太平洋センター(Center for the Pacific Rim)が設置されており、今回の「アジアにおける宗教とグローバル化」学会はそこが主催して開かれた。"Educating Minds and Hearts to Change the World"(精神と心を教育することによって世界を変える)というサンフランシスコ大学の教育理念は、仏教・真宗を通した「宗教的人格の陶冶」という大谷大学の学風に重なるが、「世界を変えるto change the world」という形での現実社会・国際社会への関心・関与にイエズス会カトリックの積極性がみられ、同じように現代の国際都市にある宗教系大学として参考にすべき点があるように思われる。





サンフランシスコ大学キャンパス

学会の座長として、準備から当日の運営まで中心になったのは、現代日本宗教を専門とする文化人類学者ジョン・ネルソン教授である。ネルソン教授は1993年にカリフォルニア大学バークレー校において学位を取得し、「長崎くんち」で有名な諏訪神社をテーマとした博士論文は、1996年にワシントン州立大学から出版されている(*A Year in the Life of a Shinto Shrine*, University of Washington Press, 1996)。2006年には国際交流基金のフェローとして半年間日本に滞在され、大谷大学でも現代の靖国問題をテーマにした自作のDVD "Spirit of the State"の上映と講演を行っている。その折りにお会いして以来、2007年にはサンディエゴで開かれたアメリカ宗教学会(AAR)でお目にかかり、昨年はマイケル・バイ先生の京都の新居における晩餐でもお話する機会があった。近年は、研究の対象を近・現代の神道から仏教にシフトし、あの『がんばれ仏教! お寺ルネサンスの時代』の上田紀行教授と同じように、文化人類学的視点から現代日本仏教の研究を進められている。

ネルソン教授を中心に計画された今回の学会の趣旨は、次のように要約できる。「ベルリンの壁が崩壊して東西冷戦が終結した20前には、21世紀の世界において、宗教が現在のように社会・政治・文化的に勢力を盛り返すことになるうとは誰も予想することができなかった。当時の一般的なポストモダン理論では、21世紀には世俗化・民主化が一層進み、個人の存在の意味づけ・位置づけに関して宗教のもつ力は弱まっていくであろうと考えられていた。ところが現実には、情報伝達技術が飛躍的に進歩し、資本や企業が多国籍化し、労働力や市場も国際化するダイナミックなグローバル化が進展する過程で、宗教思想や実践は単に命脈を保ったというより、新たな形で盛んな勢いを見せるようになってきている。この現象について、西半球の状況は近年調査研究が進み、宗教とグローバル化について新しい理論が社会学や宗教学の分野で提出されている。それらの分析や理論が、イン

ド・中国・韓国・日本・インドネシア・フィリピンなどアジア諸国の多様で活発な宗教の現在にも、有効にあてはまるのかどうかを検証する必要がある。市場経済に合わせて飛躍的發展を遂げつつある“社会主義国”中国には現在約3億人の宗教人口が存在し、中でもキリスト教人口は世界一のスピードで増加しつつある。インドネシアは世界中で最も多くの多様なイスラム人口を抱えている。IT産業を中心に発展を続けるインドでは国粹的なヒンドゥー教徒の声が政治に一層大きな影響力をもつようになっている。このようなアジアの状況の中で、戦争や暴力的な衝突を避け、宗教的寛容と多元主義を培うことは如何にして可能なのか。アジアの平和的な発展に果たすべき宗教の役割はどのようなものなのか。グローバル化していく性格をもつ現代の宗教は、アジアにおける人権の確立に対して障碍とはならないのか。原理的に“反グローバル化”を掲げる戦闘的な宗教集団の活動は、一層過激化して全面的な戦争を招くような危険はないのか。現代社会学・宗教学・アジア宗教を研究する専門家が学際的に集まり、“宗教”と“グローバル化”という相互に依存し影響しあう問題について、様々な角度から議論を行い、理論的な理解を深める。」

以上のように、この開催趣旨には、現代の宗教研究における社会学的アプローチ・理論の重要性に対する認識が反映されている。これは当研究所の国際仏教研究(ドイツ・フランス班)で現在進められているフランス国立高等研究院(EPHE)宗教社会学部門(GSRL)との研究交流の方向性とも重なる。(帰国後、前回2006年の日仏合同シンポジウムをもとにした論文集『揺れ動く死と生：宗教と合理性のはざまで』[見洋書房 2009年3月20日刊]の刷り上がりを手にしてその第4章「死と宗教の現在」に収められた論文に目を通すことができたが、今回のサンフランシスコ大学での学会は、ジャン＝ポール・ヴィレーム教授の「超近代(ultramodernité)の文脈における宗教」や田辺繁治教授の「再帰性のなかの宗教」に論じられているような、アンソニー・ギデンズ以降の現代宗教社会学理論を前提としており、杉村靖彦教授が指摘されている「再帰性(reflexivity)の反省化(reflection)という仕方」(p.233)を基調にしていたという印象を受けた。また、これも帰国後であるが、4月9日に本学で行われたイースタン・ブディスト・ソサエティー(EBS)の公開シンポジウムにおける講演で、ゲイレン・アムシュタッツ博士は、真宗が日本宗教の中で最も近代性を備えた宗教であり続けながら宗教思想として国外の知識人・研究者に正当に認知されてこなかった理由として、その近代的再帰性について幅広い理論を用いて興味深く提示するような研究が欠けていることを指摘

されていた。21世紀のグローバル化した世界の学界・思想界に浄土真宗を「解放」し「普及」するためには、社会学や宗教学の理論・方法を介した「再帰性の反省化という仕方」が欠かせない。来年に予定されているEPHEとの二回目の合同シンポジウムや、ジェイムズ・C・ドビンズ教授を客員として開講される大学院特別セミナー「宗教学的アプローチによる真宗研究」がその良い機会になればと願う。自らの伝統の近代性を一旦対象化して反省・理論化する試みがなければ、ウルトラモダンの文脈における真宗の未来は見えてこないように思われる。

グローバル化する現代アジア諸宗教について、「その再帰性の反省」という形で企図された今回のサンフランシスコ大学での学会は、3人の著名な理論家・学者による基調講演と、アジア各地域の具体的な事例を取り上げた9本の研究発表によって構成されていた。

〈基調講演〉

1. "The World's Third Spaces: Novel Assemblages of Territory, Authority, and Rights," Saskia Sassen (Columbia University) 「世界の第三の空間：領土・権威・権利の新たなアセンブリッジ（組み合わせ）」サスキア・サッセン（コロンビア大学）
2. "Religious Ambivalence to Globalization in Asia," Mark Juergensmeyer (UC Santa Barbara) 「宗教のグローバル化に対する曖昧で矛盾した姿勢-アジアの場合」マーク・ユルゲンスマイヤー（カリフォルニア大学サンタバーバラ校）
3. "Buddhism and Globalization: The Rise of Early Asian Identity," Nayan Chanda (Yale University) 「仏教とグローバル化：古代におけるアジア・アイデンティティー形成への貢献」ナヤン・チャンダ（エール大学）

〈研究発表〉

1. "Spiritual Economies: Islam and Globalization in Contemporary Indonesia," Daromir Rudnyckj (University of Victoria, British Columbia, Pacific and Asian Studies)
2. "Political and Economic Possibilities for Religious Dialogue between China and India," Eric Hanson (Santa Clara University, Political Science)
3. "Happy Birthday Mazu: Empress of Heaven, Goddess of the Sea." (FILM) Introduction by filmmaker Jonathan H.X. Lee (UC Santa Barbara, Religious Studies)
4. "Localizing Global Patterns in Islamic Communities in China," Michael C. Brose (University of Wyoming, History)
5. "Globalization, Nationalism, and Korean Religion in the 21st Century," Don Baker, (University of British Columbia, Vancouver, Institute of Asian Research)
6. "Asian New Religions and Global Soft Power," Nancy

Stalker, (UT Austin)

7. "Globalizing the Religious Market in China: How Incoming Foreign Religions Affect State Religious Policy," Noam Urbach, (University of Haifa, Humanities)
8. "In Search of the Pure Land: Globalization and Buddhist Revival in Contemporary China," Keping Wu (The Chinese University of Hong Kong, Anthropology)
9. "Gender and Moral Visions in Indonesia," Rachel Rinaldo, (USF Center for the Pacific Rim, Kiriyaama Fellow)

基調講演も含めてそれぞれの発表時間が40分から45分あり、質疑応答の時間も十分に確保され、ディスカッションが活発に行われた。研究発表のそれぞれは現代インド・インドネシア・中国・韓国・日本の特徴的な宗教現象の現地調査に基づいており、理論的な分析を経てまとめたもので、その詳細をここに紹介することはできないが、具体的な事例から類型・パターンにまで抽象化して分析を加え、今後の見通しや問題点について専門領域・地域を越えた聴衆と議論することができるレベルに達している点が共通して優れていた。

グローバル化の理論面では、基調講演に招かれたサスキア・サッセン、マーク・ユルゲンスマイヤー、そしてナヤン・チャンダの三氏が特に注目を集め、学会会場で販売されていたそれぞれの最新刊はすぐに売り切れていた。

- ・ Saskia Sassen, *Territory, Authority, Rights: From Medieval to Global Assemblages*, Updated Edition (Princeton University Press, 2006)
- ・ Mark Juergensmeyer, *Global Rebellion: Religious Challenges to the Secular State, from Christian Militias to Al Qaeda* (University of California Press, 2008)
- ・ Nayan Chanda, *Bound Together: How Traders, Preachers, Adventurers and Warriors Shaped Globalization* (Yale University Press, 2008)

筆者が会場で求めることができたのはナヤン・チャンダ氏のペーパーバック版のみであったが、非常に読みやすく、特にその第4章 "Preacher's World"（伝道者の世界）には、今回の基調講演テーマとなっていた「アジアというアイデンティティー」の形成に果たした仏教伝道の役割が、大きな歴史的な文脈の中での的確にまとめられている。仏教こそ人類史上最初の伝道宗教であり、インドから各地に伝播することによって「アジア世界」をひとつにまとめる (bound together) 上で最も優れたはたらしをした宗教であることを論じて興味深い。学会初日のレセプションでチャンダ氏と言葉を交わす機会があり、京都の仏教系大学からの参加であることをお話すると、ちょうど最新刊が和訳されて出たところだと笑顔で教え

て下さった(『グローバリゼーション：人類5万年のドラマ(上)(下)』エヌティティ出版2009)。

今回の学会は、ジョン・ネルソン教授とサンフランシスコ大学環太平洋センターの入念な計画と行き届いた運営によって内容的にとっても充実しており、発表者・参加者は、ディスカッションを通じてそれぞれの研究に有意義な刺激・新たな視点を獲得できるような国際会議であった。ネルソン教授による閉会の言葉によれば、この学会に関心をもった出版社数社から本にしたいという申し出があったそうなので、近い将来、その成果の詳細は広く学界・世界に公開され共有されることとなる。



ネルソン教授とその学生と一緒に(レセプション)

## 海外調査出張報告

### インド東部オリッサ州SARASVATI研究所との共同研究 研究調査出張報告

海外特別派遣者・准教授 山本 和彦

2009年3月7日(土)から3月15日(日)まで、オリヤー文字(コロニー書体)で書かれたサンスクリット貝葉写本調査のため、インド東部オリッサ州の州都ブバネシュワール市とその周辺地域を訪れた。

日本からオリッサまでの航空直行便はない。デリーなどインド国内の国際空港まで行き、そこから翌日に国内線の便に乗り換えてブバネシュワールの空港まで行くことになる。どんな行き方をしても、往路は最短で2日かかる。今回は1週間という短期調査であったので、便が毎日ある成田・デリー間の日本航空を使って往復した。

オリッサ州はインド東部に位置し、ベンガル湾に面している。コルカタ(旧カルカッタ)市を中心とするベンガル地方とチェンナイ(旧マドラス)市を中心とするタミル・ナドゥ地方との交易の中継地域であり、ベンガル文化圏とタミル文化圏が交差する地域である。人と物の交流の盛んな場所は、宗教や文化も発達する。紀元前にはアショーカ王が碑文を建て、仏教が盛んになった場

所でもある。仏教、ジャイナ教、ヒンドゥー教の遺跡が数多くあり、いまだに未発掘の仏教遺跡も存在する。米国の大学がインド人考古学者の協力のもとで発掘中の仏教遺跡もあった。

州都ブバネシュワール市からクルマで3時間半ほど有料高速道路を北に向かうとバドラクという小さな町がある。その町外れにサラスヴァティー研究所がある。この研究所は約5000本の写本を所蔵しており、ほとんどが未整理のままであったが、いままでの本学研究所の調査によって、叙事詩やプラーナと呼ばれる古伝書などの文学、ダルマ・シャーストラ(法典)、祭祀についての文献、天文学、政治学、カーヴァヤ(詩)、タントラ(密教)、ウパニシャッド(奥義書)などの写本があることが判明している。具体的には、菩提樹の供養方法を述べた『アシユヴァッタ・プージャー』、密教図像学に関連した内容である『バトウカ・バイラヴァ』、サンスクリットの辞典『アマラ・コーシャ』の注釈書、ヒンドゥー教の祭祀

を内容とする『プラーヤシュチッタ・カラナ』と『プラーヤシュチッタ・マノーハラ』、天文学書である『ジャータカ・ラトナーヴァリー』と『ジャータカ・アランカーラ』、プラーナ文献である『ナーラダ・プラーナ』、『スカンダ・プラーナ』、『ガルダ・プラーナ』、『バーガヴァタ・プラーナ』、オリヤー語版の叙事詩『マハーバーラタ』と『ラーマーヤナ』、政治学を内容とする『チャーナキヤサーラ・サングラハ』などの写本が所蔵されている。

なお、サラスヴァティー研究所のサダーナンダ・ディクシッタ所長とアチュンターナンダ・ダス副所長と面会することができ、研究所でのサンスクリット教育の現状や研究所が発行している『ローカ・ブラジュニヤー』（世界の智慧）という雑誌の出版状況などについて説明を受けた。

ブバネシュワール市にあるオリッサ州立博物館は、3万本以上の写本を所蔵しており、オリヤー文字写本では最大のコレクションを誇っている。未整理の写本もまだまだたくさんあり、非常に興味深いコレクションである。ここでは写本の調査と写本カタログを入手することができた。さらに、オリッサ州考古学局のD. R. プラダン博士から貝葉写本と仏教遺跡の発掘状況などの情報を得ることができた。博士はアショーカ王の石像を発掘した人物である。その像は現在この博物館に保存されている。

プリー市にあるシュリー・ジャガンナータ・サンスクリット大学では、ハリハル・ホータ教授に会うことができた。ホータ教授の指導で貝葉写本を研究テーマに博士論文を執筆中の学生シュリニヴァーサ氏を紹介してもらうことができた。シュリニヴァーサ氏の案内で同じくプリー市にあるラグナンダン図書館所蔵の貝葉写本を調査することができた。ここには200本以上の写本が所蔵されていた。

写本研究は、現地での情報収集が最も大切である。研究所や図書館や大学などが写本を所蔵しているとしても、カタログが公開されていなければ、そのコレクションの存在を知ることはできない。さらに個人が所蔵しているコレクションは世間にはまったく知られていない。今回の研究調査では1本ずつの写本を最初から解読していくという作業は時間的制約のため不可能であった。未知の写本を発見するためにも、さらに既知の写本であってもその内容を検証するためにもじっくりと調査・研究する必要性を実感した研究調査出張であった。



サラスヴァティー研究所所蔵のサンスクリット貝葉写本

# 海外研究者招聘「公開研究会・共同研究会」報告

## 「公開研究会」2009年3月26日(木) 於 マルチメディア演習室 チベット文学史における『サキヤ格言』の位置 ——サキヤ・パンディタ略伝と『サキヤ格言』について——

rGya ye bKra bho (扎布, 青海師範大学)

西藏文献研究班は、2009年3月1日～30日までの間、青海師範大学ジャブ教授を招聘した。教授の専門は、チベット文学であり、*Bod kyi rtsom rig lo rgyus skal bzang mig sgron* (藏族文学史) (上下、青海民族出版社、2002年)、*Nyi hong gi skad yig tshad ldan rab gsal me long* (標準日語藏語対照読本) (上下、bKra shis tshe ringとの共著、甘肅民族出版社、1999年)などの業績がある。2009年3月26日に教授を講師に迎え「チベット文学史における『サキヤ格言』の位置——サキヤ・パンディタ略伝と『サキヤ格言』について——」と題する公開研究会を開催した。以下に当日配布された資料に若干の手を加えたものを示し、公開研究会の報告としたい。

### 1. サキヤ・パンディタ略伝

#### A) 家系

- ・コン ('Khon) 氏
- ・サキヤ寺 (1073年創建)
- ・サキヤ派
- ・サキヤ五祖：白衣の三人 (dkar po rnam gsum) と赤衣の二人 (dmar po rnam gnyis)

#### B) 時代

- ・生没年：1182-1251
- ・分裂時代 (842-1252) のおわり
- ・インド 1206年、イスラムのスルタン王朝建国
- ・モンゴル勢力の拡大時期

#### C) 本物のパンディタ

- ・チベット・インド・ネパール3国の善知識に師事
- ・内外の学問すべてに精通
- ・講説と議論と著作 \*近年、新たに3冊の全集が発見された

#### D) モンゴルへ

- ・63歳の時 (1244年) 甥のパクパ ('Phags pa,

1235-1280)、チャクナ (Phyag na) とともに

### 2. 『サキヤ格言』概観

#### A) 論書の題名：

- ・サキヤ・レクシェー (*Sa skya legs bshad*) :  
レクシェー=subhāṣita 嘉言! 格言?
- ・善説宝蔵と称する論書 (*Legs par bshad pa rin po che'i gter zhes bya ba'i bstan bcos*)

#### B) 論書の本文

- ・形：偈頌 (tshig bca'd)
- ・構成：全9章、464偈
- ・特色：
  - 主題=俗なる人法、善悪の取捨
  - 叙述形式=7音1行、4行1偈、1偈にて意味が完結する
  - 修飾 語の修飾=Rang bzhin brjod pa 喩えによる修飾=Zla bo dngos po'i dpe喩法 (dpe chos)

#### C) 論書の源泉

- ・テングェル修身部 (lugs kyi bstan bcos、デルゲ版 vol.ngo) 所収の7つの論書
- ・カウティリヤ実利論
- ・パンチャ・タントラ
- ・マヌ法典
- ・バラモン文化の影響
- ・敦煌文献 *Phus nu la gdams shing bstan pa'i mdo*

#### D) 論書のひろまり/影響

- ・チベットにおけるひろまり
  - チベットにおける相承
  - 本論書の形式を踏襲した論書
  - 注釈
  - 研究

- ・他の地域へのひろまり
  - －翻訳
  - －研究

E) 評価

- ・リンブンバ・ガワン・ジクテン・タクバ (Rin spungs pa Ngag dbang 'jig rten grags pa, 16c) 『サバンのアヴァダーナ良縁善道 (Sa panrtogs brjod bska! bzung legs lam)』「世間の眼となる現象」
- ・チベット文学史上の位置
  - －「俗なる人法」は「聖なる仏法」の基盤であり、その2つを1つのものとして関係づけている。「俗なる人法」をよくなせば、「聖なる仏法」もよくなることができるということをはっきりと示している。
  - －「俗なる人法」をも重視し、四徳 (brjod bya sde bzhi) のうち義に合わせた「俗なる人法」の理論が発展した
  - －格言 (legs bshad) 文学の嚆矢

3. 補説 サキヤ・パンディタのチベット文化史上の位置と影響

A) 位置

- ・チベットで「五明」の学問の伝統を開いた
- ・特に『ブラマーナ・ヴァールティカ』をはじめとする主要な仏教論書に対する学問伝統を打ち立てた
- ・チベットにおける講説と議論と著作の方法を理論的に決定した
- ・『詩鏡』をチベットではじめて紹介した
- ・チベットにおいて「俗なる人法」の教えを完



「公開研究会」講演中の扎布教授 (右側)

成させ、「格言」という文学ジャンルを打ち立てた

- ・チベットで芸術に関する論書を初めて著作した
- ・シヨントン・ドジェ・ギェンツェンが『アヴァダーナ如意樹』『詩鏡』などを翻訳し、声明学の伝統が発展したが、それもまたサキヤ・パンディタの影響による生まれたものである。サキヤ・パンディタ以前、チベットに十明の伝統はあまり発展していなかったが、彼がその伝統を打ち立て、シヨントンとパン翻訳師の2人によっておおいに発展させられた。[ダルトー・ダムドゥル・ワンポ ('Dar stod dGra 'dul dbang po, 16c) 『五明史 (Tha snyad rig gnas lnga'i byung ba)』]
- ・チベット文化の種をモンゴルに蒔いた

B) 影響

- ・ツォンカパ (1357-1419) による賞賛
- ・ダライ・ラマ5世 (1617-1682) による賞賛 (『チベット王統記』)
- ・チベットでの言い伝え
  - －サキヤ・パンディタとロンチェン・ラブジャムパ (Klong chen rab 'byams pa, 1308-1364)、ツォンカパの3人は、雪山国の三文殊である。
  - －語に長けたのはサキヤ・パンディタ。意味に長けたのはプトン・リンチェン・ドゥブ (Bu ston Rin chen grub, 1290-1364)。両者に長けたのはツォンカパ。
- ・自分自身のことを正直に語った『ガギェーマ (Nga brgyad ma)』という作品

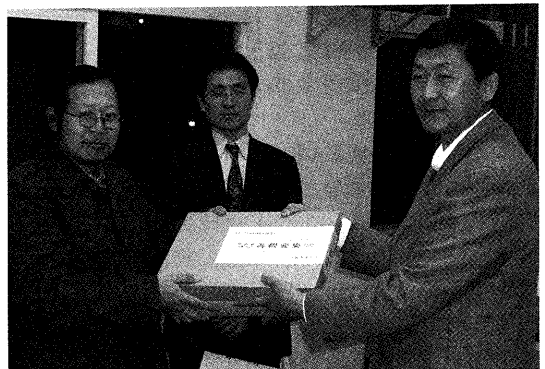
「共同研究会」2009年3月28日(土) 於 演習室6 (響流館3F)

『ゲンデンの教え (ゲルク派) が栄える請願・成就者の真実の語 (dGe ldan bstan pa rgyas pa'i smon lam grub pa'i bden tshig)』和訳

ゲルク派六大寺の一つに数えられ、東北チベット・アムド地方にあるラプラン寺の大化身ラマ、グンタン・コンチョク・テンペー・ドンメ (Gung thang dKon mchog bstan pa'i sgron me, 1762-1823) により著されたこの詩は、11偈と短いながらも、仏教の思想、とりわけゲルク派の特徴を完結にまとめており、その美しさから、「シャン

バラにまで普及した」とまで評価されている作品である。著者自身による自註 (*dGe ldan bstan pa rgyas pa'i smon lam grub pa'i bden tshig gi' grel pa*、グンタン・コンチョク・テンペー・ドンメ全集vol. caに所収) もある。以下に示す和訳は、2009年3月28日に開催された研究会において、西藏文献研究班によって招聘された青海師範大学のジャブ教授の指導のもと、自註を参考にしつつ試みられたものである。

- 1 仏すべてを生む父上でありながら  
仏子の姿で数多くの世界において  
仏の教えを保持するという誓いをたてた真実の  
力によって  
ロサン仏の教えが栄えんことを!
  - 2 昔、頂幢仏の御前にて  
誓った際に「大勇」と  
菩薩と仏に賞賛された真実の力によって  
ロサン仏の教えが栄えんことを!
  - 3 清浄な見解と行いの伝統を広げるため  
牟尼のみもとに水晶の数珠を捧げ  
法螺貝を頂戴し予言された真実の力によって  
ロサン仏の教えが栄えんことを!
  - 4 見解は正しく、常・断の極端から脱し  
瞑想は正しく、沈み込みと高ぶりの闇が消え  
行いは正しく、仏のみ教え [=戒律] のとおり  
に修行した  
ロサン仏の教えが栄えんことを!
  - 5 多聞を広く求めたが故に賢明で  
聞いた内容をそのまま心に合わせたが故に高潔  
で  
すべてを教えと衆生のために回向したが故に善  
良である  
ロサン仏の教えが栄えんことを!
  - 6 了義未了義の仏の經典はすべて矛盾なく  
一人の人間が実践できる教えであると  
確信を得たためあらゆる罪行が止まった  
ロサン仏の教えが栄えんことを!
  - 7 仏説の教えである三蔵の学問と  
体得の教えである三学を實踐し  
学者であり行者である者の行いはすばらしい
- ロサン仏の教えが栄えんことを!
- 8 外は声聞の行〔戒律〕により柔和であり  
内には二次第のヨーガ〔成就〕の勇気を持つ  
顕密の善道を矛盾することなく友〔=たがいに  
助け合うもの〕とする  
ロサン仏の教えが栄えんことを!
  - 9 因の乗〔顕教〕として説かれた空性〔智慧〕を  
果の方便〔密教〕により成就される大衆と  
合わせたものが法蘊八万の心髄である  
ロサン仏の教えが栄えんことを!
  - 10 三士の道の守護尊の主である  
六臂マハーカラと多聞天、ヤマーントカなど  
誓いをたてた海のごとき〔数多くの〕護法尊の  
力によって  
ロサン仏の教えが栄えんことを!
  - 11 要約すれば聖なるラマが長寿をまっとうし  
賢明で高潔なすぐれた持法者が大地に満ちて  
施主の富貴が増大することにより  
ロサン仏の教えが栄えんことを!
- 責任感を持ち善悪の取捨を知っているラブジャムパ・ロサン・テンパ (Rab 'byams pa Blo bzang bstan pa) に勧められ、総じて現在、瀕死の病人を医者が見捨てるように、尊者ラマの教えを護持するものがすこしもいないので、わずかでも教えが残ればという願いにより、僧コンチョク・テンペー・ドンメが書いた。
- (2009年3月27日)  
研究会参加者・翻訳者：ジャブ教授、三宅伸一郎、井内真帆、伴真一郎、日高 俊、渡邊温子、山本幸子



西藏文献研究班の研究成果出版物を寄贈

## 公開講演会報告

# 「廃墟のなかの大学」 ～沖縄戦後・反抗・アクティヴィズム～

大谷大学史資料室 研究補助員 大畑 博嗣

大谷大学史資料室は、2009年3月6日に響流館3階マルチメディア演習室において、琉球大学准教授・阿部小涼氏を講師に迎えて「廃墟のなかの大学：沖縄戦後・反抗・アクティヴィズム」という講題の講演会を開催した。

先の大戦において日本国内で唯一地上戦が行なわれ多大な被害を受けた沖縄は、アメリカの統治下におかれた。そのなかで、昭和25（1950）年に琉球大学が開学するのである。民政布告30号（琉球大学基本法）に基づき、同年2月に行なわれた琉球大学開学式典は、「琉球大学贈渡及び学長任命式」という式典名からわかるように当時の琉球大学が占領軍アメリカによる開学であることを明確化したものであった。その翌年には琉球教育基本法が制定され、沖縄における教育行政が開始する。こういった状況のなか、琉球大学では昭和28（1953）年に「学生準則」、昭和31（1956）年には「学生心得」として、学生の言論の自由を規制する学則が制定され、「学生又は学生の諸団体が新聞、雑誌、パンフレット、その他を出版しようとするときは指導教員、顧問教員の指導を受け、学長に届出なければならない」、「学生又は学生の諸団体が出版物を配布しようとするときは、事前に配布物を添えて学長に届出なければならない」（「琉球大学学生通則」第16条、第17条、1963年制定）とあるように、現在まで琉球大学で通用している。

このような琉球大学をとりまく状況のなか、琉球大学生は二度弾圧を受けるのである。当時のアメリカ国務長官ダレスや副大統領ニクソンによる「沖縄基地無期限保有宣言」、米軍基地建設に伴う劣悪な労働環境という沖縄を取り巻く社会的背景のなかで行なわれた、昭和28（1953）年の第2回メーデーにおいて、即時日本復帰・労働法の早期制定要求に加え、琉球の軍事基地化反対・土地収用法即時撤廃などの要求のなかに、「植民地化教育反対、琉球大学長・副学長の即時罷免」という要求も盛り込まれていた。これは、琉球大学生が那覇市内で原爆展の開催、灯火管制（防空演習）中に寮内でランプをつけた等の理由で謹慎処分を受けた学生達が訴えたが、この報復措置として退学処分を受けるのである。これが、いわゆる第一次琉大事件である。

さらに、その3年後に、アメリカによる土地接収に象徴される軍用地政策に対して、沖縄の行政府である立法院はアメリカ民政府に対し、軍用地料一括支払い反対・適正補償・損害賠償・新規接収反対の四つの要求を示す。これが「土地を守る四原則」と後に言われるもので、この四原則貫徹運動が沖縄人民を巻き込んだものとなる。琉球大学生もこの運動に参加するのだが、この動きに対してアメリカ側は、沖縄中部地方一帯にオフ・リミッツ（米軍要員立入禁止）と琉球大学の反米学生に対する処分要求といった強硬な姿勢で対抗する。昭和31（1956）年7月28日、琉球大学生が反米的なプラカードを掲げて、県民大会の会場までデモ行進をしたことを理由に挙げて8月7日にオフ・リミッツを宣言する。一方、琉球大学側には財政援助の打ち切りを通告する。そこで琉球大学理事会と学長は、反米デモを行なった学生に対して謹慎処分にしたが、沖縄を統治するアメリカ民政府は、この処分を不服としたために処分をやり直し、「反米的言辞を弄した」として六人の学生を除籍、一人を謹慎処分にしたのである。これが、いわゆる第二次琉大事件である。（『沖縄戦後史』中野好夫・新崎盛暉著、岩波書店、1976年初版、2005年第12版）

第二次琉大事件に関し、2006年に琉球大学の調査チームが第二次琉大事件でアメリカ民政府による処分の介入を示すミード文書を発見し、当時処分された学生に対し処分撤回がなされた。しかし、第一次琉大事件では、第二次琉大事件と同様にアメリカ民政府による処分の介入を示すホーウッド文書が発見されたにもかかわらず、事件から55年経過した現在に至っても学生に対する処分が撤回されていない。これに関して琉球大学内外で問題になり、琉球大学内ではシンポジウムが開かれ、沖縄県内の新聞（琉球新報・沖縄タイムズ）で第一次琉大事件に関する報道や論説が掲載されている。

このような、権力（アメリカ民政府）に抵抗する琉球大学生は、第一次・第二次琉大事件だけではない。現在の琉球大学内で直面する問題に対しても、学生は権力（大学当局）に抵抗するのである。大学内でのセクハラ問題に対して学生有志が立ち上がり、シンポジウムを開催している。また、琉球大学は2009年度からの非常勤講



師の大幅な削減とそれに伴う外国語科目のコマ数削減を決定しているが、これに関して学生有志は大学当局へ意見書を提出し、大学構内で反対の署名を集める活動を行っている。また、学生有志は、2009年3月9日から大学側に対し、(1)新カリキュラムの撤回(2)公開説明会の開催(3)学生代表の役員会への参加(4)教員、職員、学生による学長、理事の選挙制度の確立を求めて大学構内に座り込みを始めている(4月11日終了)。このような大学の方針に対する抵抗を表す大学構内の「占拠」は、世界各地の大学でも行なわれており、学生達は琉球大学内の「占拠」もその活動に繋がるものと位置づけているという内容の講演であった。

講演の後、講師と参加者による質疑応答の時間を設けられ活発な質疑となった。講演会終了後、講師を含めた

参加者は、学内のBIG VALLEY CAFEに移動し、講師を囲んで懇親会を開催し、盛会のうちに講演会は閉会した。



講師(前列左から3人目・阿部先生)を囲んでの懇談会

## 特別研究員研究成果報告①

### 日本仏教における宗教意識と社会的行動

元特別研究員 Ugo Dessi

真宗ではこれまで倫理と社会運動という問題が慎重に扱われてきた。その主な理由は、創始者親鸞(1173-1262)が重視した「はからい」という教義、つまり自分の打算を捨てる必要性にある。親鸞は、人間は「はからい」を捨て「他力」という阿弥陀如来の働きに自らを任せられることができると考え、「自力」による善行が「信心」という中心的宗教体験と浄土「往生」の障害になると主張した。しかし、戒律そのものを疑っていたとはいえ、親鸞は道徳の実践を不可能と考えていたのではなく、むしろ道徳を「他力」という考えに従って慎重に考察すべきと見ていた。真宗倫理の基礎には阿弥陀如来の本願の普遍性があり、これを前提として親鸞は念仏者を「同朋」とみなし、彼らの平等を認めた。さらに、阿弥陀如来の慈悲に報いて(「報恩」)世の中の悪を捨てるよう信者に勧めた。さらに留意すべき点は真宗の批判的側面であり、これは「神祇不拝」の概念に密接に関係する。

これらの側面は現代の真宗倫理に関する論議と社会運動の基盤となっている。例えば、「同朋社会」の重視と「神祇不拝」の概念は、真宗が進めている差別問題と平和主義の運動の背景にも見られる。この点において、組織・運動家によってより積極的に取り組まれているのが、靖国問題、被差別部落問題、ハンセン病問題である。さらに、1980年代以降になると、ターミナルケアと社会福祉に従事するビハラー活動などにもその領域は広がりを示した。だが、真宗は信仰が社会生活から分離しているという点が、様々な機会でも批判されてきた。津田左右吉、加藤周一、尾藤正英などがこのような批判を加えている。一方、真宗信仰についての消極的理解を懸念している真宗作家も少なからずいるようである。

真宗教団における他力信仰と社会行動の間の問題、および真宗道徳の特性を確認するため、本稿筆者は2008年に日本26都道府県の真宗信者400人に対し、調査を実施

した。回答者のほとんどは本願寺派・大谷派に属する門徒（280人）と僧侶（120人）だが、門徒の平均的態度が明らかになるように、総代を約1割に制限した。この調査の目的は二つある。ひとつは真宗信者の道德観と社会行動の関係を個人レベルで研究すること。もうひとつは門徒の道德観と宗教意識との関連性を確かめること。

調査結果は、次のようにまとめられるだろう。他力という教義は必ずしも信者の道德性に障害になるわけではないようだ。個人レベルでは善行への意識があり、真宗的道德の特性を表す要素が見られる。全体的に、「心の平安」、つまり宗教的・精神的生活への傾向があるが、それは社会活動への意欲・参加に乏しいことを意味するのではない。だが、特に門徒の場合は政治的に中立の活動に参加する傾向が明らかである。回答者には「思いやり」重視の姿勢が顕著だが、最も重要な価値観として、日本の伝統的価値観である「協力」、「正直」、「礼儀」、「人への尽力」、「親孝行」を選ぶ者が多い。信者が「親

孝行」を選ぶ割合の方は、全国平均と比較すると低い。日本の伝統的価値観「恩返し」と重なる「報恩・仏恩への報謝」という宗教的価値観はよく強調されている。僧侶より、門徒の方が権威主義的価値観を重視するが、全国平均と比べれば、その支持率はある程度低くなる傾向がある。そのため、真宗信者の伝統的傾向が権威主義的価値観に一致するとは言いがたい。だが、権威主義的価値観と宗教意識には関連性が見られる。真宗信者が「平等」という真宗的及び近代的価値観を重視する様子はある。この概念は念仏者の平等以外に、おそらく他の社会問題に当てはまるが、他宗教の信者の宗教的平等は全面的には認められていないようである。それに加えて、宗教的排他主義と自民族・自文化中心主義には関連性が窺える。また、信者の道德観念はもう一つの真宗的及び近代的価値観によって特徴付けられている。即ち、真宗教団では「非暴力」が重視され、それが平和と死刑制度に対する信者の姿勢に意味合いをもつようなのである。

## 特別研究員研究成果報告②

### 「歴史地震・津波記録の理工学的手法による検証と発生機構の推定の研究」

元特別研究員 西山 昭仁

筆者が、2008年度中に大谷大学特別研究員として実施した研究の内容とその目的及び成果について、以下にその概要を述べていく。

筆者は、「歴史地震」という歴史時代に起こった地震災害を研究対象としている。歴史地震の研究は、理科系の地震学と文科系の歴史学との学際的な研究分野であり、地震学・歴史学の双方の側面から様々なアプローチが成されている。歴史学における歴史地震の研究は災害史の一部に位置付けられており、過去にどのような災害が発生し、それによって人々はどのように対応したのか、当時の社会はどのような影響を受けたのか、といった課題を明らかにすることが目的とされる。一方、地震学における歴史地震の研究は、過去に発生した地震による被

害状況を詳細に分析し、特定の地域における被害特性を解明することで、今後の地震防災に寄与することを目的としている。

以前に筆者は、前者の立場から江戸時代の京都・大坂・江戸といった大都市を襲った被害地震について、前者のアプローチで研究を行ってきた。しかし近年は、後者の立場から京都・大坂の立地条件と地震被害の特性について研究を実施している。その中で今年度は大坂を対象地域として、江戸時代中期に発生した宝永地震の事例を取り扱った。その研究の内容について次に要約を述べていきたい。

海溝型の巨大地震である宝永地震は、宝永四年十月四日（グレゴリオ暦：1707年10月28日）の午下刻～未上刻

頃(午後1時前後)に、遠州灘沖及び紀伊半島～四国沖を震源として発生した。この地震によって、東海道～紀伊半島～四国の太平洋沿岸地域では多大な被害が生じ、その直後に発生した津波によって同地域は甚大な被害を蒙っている。

太平洋で発生した津波は、紀伊半島と淡路島の間を紀淡海峡を通過して大坂湾へ侵入し、地震発生から約2時間後の申上刻頃(午後3時過ぎ)には大坂へも到達した。そのため、当時約36～37万人の人口を有する大都市であった大坂は、地震だけではなく津波によっても被災するに至った。大坂湾に流入する安治川や木津川の河口から市街地へと侵入した津波は、大坂市中を縦横に廻る堀川に沿って更に内陸部へと遡上した。この時、安治川や木津川の河口付近に碇泊していた多数の大船が、河川を遡上する津波に押し上げられて幾筋もの堀川を遡行し、堀川に浮かぶ川船に次々に衝突していった。津波による大船群の遡行によって、大坂市中の幾つもの堀川内で川船が大破・転覆して多数の溺死人が生じ、堀川に架かる橋が大船の衝突で崩落するなど、大坂の市街地は多大な被害を蒙った。このように、大坂市中では津波による被害が大きかったことから、その被害状況に関心が集中する傾向がある。しかし、宝永地震時の大坂市中では、津波が到達する約2時間前に受けた地震による被害も大きかったのである。

この研究では、大坂市中での地震被害について、信憑性の高い史料のみを選択して被害状況を検討し、より厳密な地震被害の評価を行った。具体的には、歴史地震の震度判定において史料の記述が根拠となっているにも拘わらず、既存の震度判定ではあまり考慮されてこなかった史料の信憑性について一定の基準を設けて、地点別の震度判定をより正確なものとした。また、今までは震度判定に積極的に用いられてこなかった被害の無かった地点や、局所的な地盤条件なども考慮に入れて地点別の震度判定を実施した。一方で、近世都市大坂の立地条件が、宝永地震時における大坂市中での地震被害に、どのような影響を及ぼしたのかについても考察を加えた。更に、宝永地震時に大坂市中での地震被害を拡大させた要因である市街地の立地条件について、当時の全国的な物流網と近世都市大坂の役割といった社会・経済的な側面からも考えてみた。

以上のような検討から、江戸幕府の政策によって海側の軟弱地盤地域へと市街地を拡大していき、全国的な海上輸送網の拠点となる港湾都市としての機能を拡充していった近世都市大坂において、地盤条件の悪い市街地(三角州上の新開発地区)が宝永地震の際に局所的に特に大きな地震被害を受けた実態と要因を考察した。この

ような被害は、西廻海運の確立と相俟って、水上輸送の利便性を重視して軟弱地盤上へ拡充されていった大坂の港湾都市としての性格上、根本的に回避することのできない必然的な被害でもあった。

この事例研究において、史料記述に見られる特定の建物の被害状況と一定の地区内での被害状況について、整合性の高い被害程度を導き出すための判定基準を考えてみた。特定の建物の被害状況を表す記述と、地区全体の被害状況を表す記述とでは、一見同じような記述でも実際の被害状況は異なっている可能性が高い。例えば、特定の建物が倒壊した状況を表す記述と、地区内で一部の建物が倒壊した状況を表す記述とでは、同じ「建物の倒壊」を表す記述でもその内容には相違がある。前者では、特定の建物が倒壊した状況を表しているだけであるが、後者では、地区内の他の建物には大きな被害が生じていない中で、一部の建物のみが倒壊した状況を表している場合が少なくない。こうした事情を考慮すると、特定の建物の被害状況に関する記述と、地区全体の被害状況に関する記述とでは、それぞれ別の基準に依拠して被害程度を判定する必要性に迫られる。この場合、特定の建物の被害程度とは異なり、地区全体の被害程度の判定に関しては、史料の文脈や他の史料記述などを総合して判断する必要がある。

このような被害程度の判断基準に関する考察方法は、他の地域で発生した歴史地震についても適用可能であり、被害の発生場所における個々の被害程度に関してより厳密に判定する際に有用であると考えられる。

以上

真宗総合研究所彙報 2008.10.1 ~ 2009.4.30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

- ◇11月12日(火) 12時10分～ (博綜館5階第3会議室)
  1. 2009(平成21)年度「一般研究」の選考について
  2. その他
- ◇3月23日(月) 10時～ (博綜館5階第4会議室)
  1. 2009(平成21)年度「指定研究」について
  2. その他

○2009年度「一般研究」研究代表者事務説明会

- ◇12月13日 12時10分～  
(響流館4階真宗総合研究所ミーティングルーム)
  1. 協同研究員・研究協力員の辞令交付
  2. 事務説明会について

○「指定研究」チーフ・キャップ・庶務連絡会

- ◇3月4日(木) 16時30分～  
(響流館4階真宗総合研究所ミーティングルーム)
  1. 2008年度「指定研究」の経過について
  2. 2009年度「指定研究」の研究計画について
  3. その他

- ◇4月29日(木) 16時10分～  
(響流館4階真宗総合研究所ミーティングルーム)
  1. 2009年度「指定研究」の研究計画並びに研究体制について
  2. その他

○2009年度研究補助員雇用事務説明会

- ◇4月9日(木) 12時10分～  
(響流館4階真宗総合研究所ミーティングルーム)
  1. 研究補助員(新規)の辞令交付
  2. 雇用契約の締結について
  3. 事務説明について

■特別指定研究

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究

- ◇11月4日(火) 16:10～17:40  
(真宗総合研究所ミーティングルーム)
 

第18回研究会

  - ・シリーズ『親鸞像の再構築』について
  - ・御遠忌記念論集について

- ◇12月2日(火) 16:10～17:40  
(真宗総合研究所ミーティングルーム)
 

第19回研究会

  - ・御遠忌記念論集について

- ◇2月17日(火) 13:00～15:00  
(博綜館5階 第2会議室)
 

御遠忌記念論集執筆者説明会

御遠忌記念特別指定研究班では、2011年度に迎える親鸞聖人750回御遠忌に向けて「親鸞像の再構築」研究を継続的に行ってきた。本年度はその成果を踏まえ、御遠忌記念論集の刊行を構想し、研究員同士による会議を上記研究会のほか随時行ってきた。また、文献目録作成のための作業を日常業務として行っている。

■指定研究  
国際仏教研究

〈英語班〉  
《会議・研究会》

- ◇佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究  
近代教学アンソロジーに続く新たなプロジェクトとして、佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」を英訳することに決定し、後期からそのための準備に着手した。
  - ・11月10日 13:00から14:30、研究所のフリースペースにて、英語班研究計画について検討し、次期翻訳研究の対象を「大谷大学樹立の精神」とすることに決定した。
  - ・2009年2月5日 14:30から16:00、研究所のミーティング・ルームにて、初回の研究会を開き、底本を決め、これからの研究会計画を立案した。
  - ・4月14日 17:40から18:30、研究所のミーティング・ルームにて、英語班新任の研究補助員と2009年度の研究の進め方について打合せを行った。今年度の研究会初回を5月12日(火) 17:00からミーティング・ルームで行うことに決定した。

《海外出張》

- ◇2009年3月12日(木)～19日(木)の一週間、井上尚実研究員が米国カリフォルニア州に出張した。13日(金)14日(土)には、サンフランシスコ大学 (University of San Francisco) で開催された学会「アジアにおける宗教とグローバル化：今後10年の見通し・類型・諸問題 Religion and Globalization in Asia: Prospects, Patterns, and Problems for the Coming Decade」に参加した。学会終了後、同州の仏教大学院大学 (Institute of Buddhist Studies)・毎田周一仏教センター (Maida Center of Buddhism)・パークレー東本願寺、カリフォルニア大学サンタバーバラ校宗教学部大学院を訪問し、米国における仏教研究と真宗開教

に関する情報を収集し、交流を行なった。

《公開講演会》

(1)10月23日(木) 17:30から19:00まで、タイ・バンコクのThammasat UniversityのNicolas Revire氏による「An Overview of Dvāravatī Art & Iconography」という講演が行われた。本学特別研究員のShobha Rani Dash氏に英語通訳等で協力いただいた。

(2)11月24日(月) 16:10から18:00まで、響流館3階のマルチメディア演習室にて、佛光大学宗教系助理教授の劉國威氏による「The Literature of the Sngags kyi bklag thabs (Method of Pronouncing Mantra) in Tibetan Buddhism (チベット仏教におけるSngags kyi bklag thabs [真言読誦法] 文献について)」という題目の講演が行われた(西藏文献研究と共催)。

〈ドイツ・フランス班〉

《海外出張》

村山保史研究員および藤枝真研究員がマールブルク大学神学部において開催されたシンポジウム「マルティン・ルター：その生涯と神学」(2009年3月23日～25日)に参加した。ルターの生涯における様々な出来事と彼の神学上の転回点とを関連させて解釈していく方法は、2017年に迎える宗教改革500周年という大きな節目を目前にした、新しいルター解釈の試みである。

シンポジウム終了後の25日午後、神学部のディートリヒ・コルシュ教授と、*Luther: Eine Einführung* (Mohr Siebeck) の翻訳について打ち合わせをした。

《出版》

ジャン・ボベロ、門脇健編著『揺れ動く死と生 宗教と合理性のはざま』が2009年3月20日に出版された。この本は、2006年に大谷大学真宗総合研究所とフランス国立高等研究院とで開催したシンポジウム「宗教と近代合理的精神——日仏文化の比較を通して」の様子を記録したものである。

2008年度中国班後期彙報

〈中国班〉

①大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の資料一覧作成  
中国華北地域関連の綴資料(仮番号19～25)の一覧作成作業を継続中。引き続き、華中関連資料(仮番号26～)にも順次着手する。

②公開研究会の開催

- 2008年11月14日(金) 16:00～18:00  
於：メディアホール(響流館3F)

映画『蒙古横断』をめぐる資料について

広川佐保(新潟大学人文学部准教授)

- 2009年2月19日(木) 15:30～17:30  
於：マルチメディア演習室(響流館3F)  
河南中部の仏教遺跡と金元碑刻  
井黒 忍(日本学術振興会特別研究員・真宗総合研究所嘱託研究員)  
中京大塔の初層壁面装飾について  
藤原 崇人(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員)
- 2009年3月3日(火) 15:30～17:30  
於：マルチメディア演習室(響流館3F)  
満洲国の文教政策  
江田憲治(京都大学大学院教授)

③中国東北師範大学との共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

2009年3月24日(火)～3月29日(日)、桂華淳祥研究員、松川節主事の二名は、モンゴル国ウランバートル市、ドルノゴビ県サインシャングダ市(ハマリイン=ヒード僧院)、そして中国北京市において、モンゴル仏教及び華北仏教、特に満洲国の対モンゴル宗教政策についての調査を実施した。

西藏文献研究

《公開研究会》

- 11月13日(木) 16時10分～  
(響流館3Fマルチメディア演習室)  
エルデニバヤル博士(内蒙古大学教授)  
「内モンゴルにおけるチベット研究の現状」
- 2月28日(土) 16時10分～  
(響流館3Fマルチメディア演習室)  
テルビシ博士(暦学者・元モンゴル国立大学教授)  
「モンゴル・ゾルハイの暦書の伝統」
- 3月26日(木) 16時～  
(響流館3Fマルチメディア演習室)  
ジャブ博士(青海師範大学教授)  
「チベット文学史における『サキャ格言』の位置」
- 3月28日(土) 14時～(響流館3F演習室5)  
ジャブ博士(青海師範大学教授)  
「グンタン・コンチョク・テンペー・ドンメ(Gung thang dKon mchog bstan pa'i sgron me, 1762-1823)『ゲンデンの教え(ゲルク派)が栄える請願・成就者の真実の語』講読」

《研究打ち合わせ》

■ 4月2日(木) 16時～

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

議題：今年度の研究業務内容の確認。

《出張》

■ 2月14日(土)～3月15日(日)

ダシュ・ショバ・ラニ嘱託研究員

出張先：インド・オリッサ州SARASVATI研究所

目的：同研究所所蔵貝葉写本の概要調査。

■ 3月7日(土)～3月15日(日)

山本和彦准教授 (特別派遣)

出張先：インド・オリッサ州SARASVATI研究所

目的：同研究所所蔵貝葉写本の概要を確認し、学術上の重要度を明らかにする。

大谷大学DB研究

事務連絡会議

◇ 9月24日(水) 10:00～12:00

議題

北京版チベット大蔵経撮影についてのヒアリング

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇ 10月30日(木) 13:00～14:30

議題

北京版チベット大蔵経撮影に関しての方針打ち合わせ

場 所：DB班チーフ個人研究室

◇ 11月20日(木) 13:30～14:30

議題

作業報告

今後の方針について

その他

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇ 3月12日(木) 16:00～17:00

議題

2008年度活動報告

今後の方針について

場 所：DB班チーフ個人研究室

真宗本廟（東本願寺）造営史研究

真宗本廟（東本願寺）造営史の全体像把握のための史料翻刻・国内資料調査等、その成果と進捗状況について報告。また、『本願を受け継ぐ人びと—真宗本廟（東本願寺）造営史—』の書名及び内容目次を確定。引き続き、公開研究会を実施すると共に、執筆者会議・編集委員会

議を開催し、造営史の全体像や諸問題点を共有化して、刊行物作成における論点や課題を整理。

《事務連絡会議》

◇ 2月17日(火) 15:00～17:30

議題：①全体会議、執筆者会議における成果と課題の整理

②目次構成の再検討

③その他

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇ 2月26日(木) 15:00～17:30

議題：①2008年度研究成果報告

②2009年度研究計画

③移管史料の活用、翻刻・撮影作業の計画等について

④その他

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

《全体会議》

第10回公開研究会（第11回全体会議）

◇ 3月19日(木) 15:00～18:00

議題：①報告会

題 目：廟堂（御影堂）の創設と大谷本願寺

講 師：東館 紹見（本学准教授）

題 目：文政廣造営の建築的な問題

講 師：山岸 常人（嘱託研究員）

②連絡事項

場 所：響流館3階マルチメディア演習室

《執筆者会議》

第4回執筆者会議

◇ 10月24日(金) 16:10～18:00

議題：①研究報告会

題 目：初期東本願寺と親鸞350回忌

報告者：川端泰幸（嘱託研究員）

②史料紹介

題 目：『御再建見聞私記』私見

報告者：工藤克洋（研究補助員）

③連絡事項

場 所：響流館3Fマルチメディア演習室

第5回執筆者会議

◇ 11月14日(金) 16:10～18:00

議題：①研究報告会

題 目：寛政度造営御影堂の諸問題

報告者：登谷伸宏（嘱託研究員）

題 目：東本願寺火災時における五ヶ村の活動

—文政度焼失を中心として—

報告者：松金直美（大谷大学親鸞聖人750回  
御遠忌特別指定研究研究  
補助員）

題 目：明治度再建における建築儀式について

報告者：山本琢（本学研修員）

②連絡事項

場所：響流館3Fマルチメディア演習室

第6回執筆者会議

◇12月19日(金) 15:00~18:00

議題：①研究報告会

題 目：御影堂の障壁画

報告者：畠中光享（京都造形芸術大学教授）

題 目：信仰と技術が織りなす京の大伽藍  
（構想概報）

報告者：伊藤延男（嘱託研究員）

題 目：近代的な付帯設備 一両堂を護る独  
自の防火用水 本願寺水道—  
御影堂修復のあゆみ

報告者：延澤栄賢（真宗大谷派宗務所主事）

②連絡事項

場所：響流館4Fプレゼンテーションルーム

第7回執筆者会議

◇1月16日(金) 15:00~17:30

議題：①研究報告会

題目：水口家文書から見た本願寺大工の動向

報告者：永井規男（嘱託研究員）

題目：安政度造営御影堂について

報告者：岸泰子（嘱託研究員）

②連絡事項

場所：響流館3Fマルチメディア演習室

第8回執筆者会議

◇2月20日(金) 15:00~17:30

議題：①研究報告会

題 目：明治度再建における材木の調達

報告者：大畑博嗣（大谷大学史資料室研究補  
助員）

題 目：山科本願寺の堂社について

報告者：草野顕之（本学教授）

②連絡事項

場所：響流館3Fマルチメディア演習室

《編集委員会議》

第2回編集委員会議

◇3月19日(木) 14:00~14:45

内容：①編集方針の確認

②2008年度研究成果報告並びに2009年度計画

③その他

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

真宗同朋会運動研究

《定期研究会》

◇毎週火曜日 14:30~17:40

テーマ：真宗同朋会運動に関する歴史と関係資料の分析

場 所：博綜館5階H501教室

《公開研究会》

◇4月10日(金) 13:00~17:00

テーマ：真宗同朋会運動の歴史について

講 師：二階堂行邦氏

場 所：博綜館5階第三会議室

■人事 (2009年4月1日付)

研究所主事(新)山本和彦 (旧)松川 節

□客員研究員

\*扎布 (bKra bho)

国 籍 中国

現 職 青海師範大学教授

研究期間 2009年4月1日～2010年3月31日

研究課題 「日本語訳『カーマストラ』のチベット語への翻訳」

指導教員 三宅伸一郎 講師

\*郑堆 (dGra'dul)

国 籍 中国

現 職 中国蔵学研究中心宗教研究所長

研究期間 2009年4月1日～2009年7月31日

研究課題 「アティシヤ大師とチベット仏教の道次第理論」

指導教員 福田洋一 教授、三宅伸一郎 講師

□特別研究員

\*ダシュ ショバラニ (DASH Shobha Rani)

国 籍 インド

現 職 本学非常勤講師

研究期間 2009年4月1日～2010年3月31日 (延長)

研究課題 「日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』の研究」

指導教員 小谷信千代 教授

\*村上徳樹

国 籍 日本

研究期間 2009年4月1日～2012年3月31日 (新規)

研究課題 「後伝期チベットにおける自己認識解釈の思想史的研究」

指導教員 福田洋一 教授

\*スターリング・ジェシカ ダウン (STARLING Jessica Dawn)

国 籍 アメリカ

研究期間 2009年4月1日～2012年3月31日 (新規)

研究課題 「寺の女性：現代日本仏教における伝統と変容」

指導教員 佐賀枝夏文 教授

研 究 所 報 第 54 号

2009年5月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435